歴史と自己の再発見

オーラル・ヒストリー総合研究会10年の記録

2003－2013

オーラル・ヒストリー総合研究会

歴史と自己の再発見

オーラル・ヒストリー総合研究会 10 年の記録

２００３－２０１３

オーラル・ヒストリー総合研究会

はじめに

オーラル・ヒストリー総合研究会 10 年のあゆみ

折井美耶子

オーラル・ヒストリー総合研究会は、2003 年 1 月 31 日文京シビックセンターで発会式を行い、そのあと第一回例会として中野卓さんの講演会を開催した。中野さんは生活史、ライフ・ヒストリー研究の先駆者であり、当日は女性を取り扱った『口述の生活史』などを取り上げて講演し、その後聞き書きの実際についての質疑が活発に行われた。会に参加した人々は、女性史に関わって聞き書きを行っているメンバーが中心で約 40 人だった。

この会の結成については、その前年 10 月イギリスからオーラル・ヒストリーの泰斗ポール・トンプソンさんを迎えて開かれる予定だった講演会が氏の都合で急遽延期となったとき、集まった人々の間で研究会の結成が提案されたのが発端だった。その後準備を重ねて 1 月の発会式となった。以来 10 年間、年間 2 ～ 3 回の例会を行い、2003 年 6 月に創刊された会報『オーラル・ヒストリー　ワークショップ　ニュース』は現在 25 号にいたった。この会報の復刻をかねて、10 周年の記念誌を刊行することになったのが本誌である。

この 10 年間、ポール・トンプソンさん、中村政則さん、大門正克さん、小野沢あかねさん、石田米子さん、倉敷伸子さん、ニール・林さん、清水透さん、林奈都子さん、伊藤康子さんなど、さまざまな方を外部からお招きして話をうかがうことができ、会員それぞれオーラル・ヒストリーに関して理解を深めることができたのではないかと思われる。なかでも大門さん、清水さんにはこの記念誌にもご寄稿いただき感謝申し上げたい。

特筆すべきは「歴史と自己の再発見」として行ったシリーズではないだろうか。会員各人が行った聞き書き、オーラル・ヒストリーについての、タイトル通りの報告である。聞き取りをし、それを分析しあるいはまとめて文章化し、発表する。その作業のなかで話者ともども歴史に対する認識を深めるという過程、それを改めて人前で報告することは、ただ聞き書きをしたことにとどまらない、より深い「歴史と自己」への理解をもたらしたのではないかと考えられる。このシリーズは今後も続けていきたいと考えている。

当初「ジェンダー・戦争・記憶」をテーマとして各人が研究するという企画があったが、それは十分深めることができずに 10 年が過ぎてしまった。しかし、会員それぞれが自分のテリトリーでオーラル・ヒストリーを実践しており、この会がそのためにいくばくかの寄与をしたのではないかと、秘かに考えてもいる。現在会員は関東を中心に、北海道、岩手、宮城、静岡など約 60 人となっている。

しかし戦後約 70 年、第二次大戦後の女性たちの活動はさまざまな分野でめざましいが、それがきちんと記録されているか、歴史に正当に評価されているか、疑問である。それらを実体験した女性たちの活動を、今こそ聞き・記録しておかなければならないと思う。3 ～40 年前に牧瀬菊枝さんたちが戦前の女性活動家の聞き書きを盛んに行ったように。

そして今若い会員を増やすことが緊急な課題となっている。私たちが獲得したこの方法論を、ぜひ若い世代に受け渡す必要があると思っている。さまざまな機会により若い人々を例会に誘うことを心がけたいし、彼女ら・彼らの新鮮な感性を私たちも学びたい。

最後にこの 10 年の間に、奥田暁子さんという優れた研究者であり仲間でもあった方を喪った。あらためて哀悼の意を表したい。

目　次

はじめに　オーラル・ヒストリー総合研究会10年のあゆみ　折井美耶子　1

第Ⅰ部　10年を振り返って

☆メッセージ　「場」が語る声　清水　透　3
☆メッセージ　「耳を傾ける」ことで聞こえてくることがある　大門　正克　4

・聞いて、書く。　青井　のな　5
・「聞き書き」の名前は実名?仮名?　石崎　昇子　6
・オーラル・ヒストリーを考える　戸川トモ子　8
・ｵｰﾗﾙ･ﾋｽﾄﾘｰの蓄積は歴史の書き換えにインパクトを与えたか？　平井　和子　9
・オーラル・ヒストリーと私　折井美耶子　10
・『橋浦家の女性たち』を編んだあとに　生方　孝子　13
・聞き取りからオーラル・ヒストリーへ　宮崎　黎子　14
・戦争体験(負の遺産の手渡しのために)の聞き書きを通して　海保　洋子　17
・敗戦と引揚―子どもの証言を検証する試み―　武田　陽子　19
・私の試行的実践―1976年～1990年～現在―　山村　淑子　22
・聞き取りと写真　―人生最初の写真、最後の写真―　むらき数子　24
・結婚風習の聞き取りから見えてきたもの　山辺恵巳子　27
・私のオーラルヒストリー　富田　裕子　29
・オーラル・ヒストリーとの出会い：旅の交差点　酒井　順子　31
・三度の津波を生きぬいた女性たちの語りに学ぶ
　―東日本大震災満3年を迎えて―　植田　朱美　34

第Ⅱ部　会報“Oral History Workshop News”
第1号(2003.6.5)～第25号(2014.3.14)　復刻版　38

おわりに　これからの10年に期待をこめて　宮崎　黎子　156

メッセージ

「場」が語る声

清水　　透

３月１４日、８年間つづいた歴史学の研究会のメンバーと、３．１１から丸３年たった震災現場を訪れた。震災半年後に同じ面々と訪れて以来２度目の訪問だ。前回は津波の来襲直後かのように、家財もそのままに、倒れかかった家屋だけの「町並み」。犬一匹見当たらない壮絶な光景に涙すら出なかった。３年経った今は、家々の土台のみが枯れた雑草に埋もれるように点々と残る、ただ延々と広がる荒野だ。＜いのち＞の気配は今もない。そこから石巻日和山へ、さらに大川第二小学校へと足を伸ばす。そこでも、だた黙々と慰霊碑に手を合わせ、誰一人ことばを口にする者はいない。敷地の片隅で、半分水にひたったまま放置されている石柱に目を奪われる。「地球上の位置　北緯３８度・・・、東経１４１度・・・海抜１メートル１２センチ」と刻まれた文字。そして、崩れかけたプールの外壁に描かれた壁画には、星空へ向かう列車の絵の傍らに「・・・ニモマケズ　・・・ニモマケズ　平成１３年度卒業制作」の文字。

文字化された被災現場のどの話よりも、大津波の壮絶さが身近に伝わってくる。かすかな海風の音と自分の鼓動以外には何も届いていないはずの耳元に、命を奪われた人々のその瞬間の声、それだけでなく、今も生きている僕に訴えかける、無数の悲痛な声が聞こえてくる。四国八十八霊場を回ったときに感じた無数の声とも重なった。同行した歴史仲間はどんな声を耳にしたか。どんな問題をつきつけられたか。いずれにせよ、こうした現場を研究会の解散の場としたことは、誰にとっても大きな意味があったように思う。

聞き得ない声を掘り起こす。それをひとつの目標としてきた聞き取りの作業。すでに大きな成果を多方面にわたって蓄積してきたが、具体的に聞こえる語りにくわえ、場が語る無言の声とどのようにして向きあうか。それは、文献史学だけでなく、オーラル・ヒストリーの方法にも、深い問題をなげかけているのではないか。　（慶応大学名誉教授）

メッセージ

「耳を傾ける」ことで聞こえてくることがある

大門　正克

1990年代に都留文科大学に勤めていたときのことである。学生と一緒に数年間、都留市に住む人たちの戦争経験を聞き取りし、そのなかで、ある高齢の女性に話を聞いた。こちらから尋ねることに対して、その女性は、くりかえし同じ話に戻ったので、私にはなかなか話が進まないように思えた。聞き取りを終え、学生たちだけになったとき、私は、学生たちに対して、「高齢になると、同じ話を繰り返す人がいて、そういう人からは、なかなか話を聞くことができないんだよ」ということを言った。

今では、訳知り顔で学生に話したその場面がとても恥ずかしく思える。だが、その場面が苦々しい経験に思えるようになるのには、それ相当の時間がたってからのことであり、すぐのことではなかった。

大学院生のころから、調査に出かけるたびに人に話を聞いてきた。通算すれば、すでに35年以上になる。ただし、ずっと同じように聞いてきたわけではない。すでに、何回か報告したり、書いたりしてきたように、1997年に農家の女性の聞き取りでうまくできなかったことがあった。2003年にオーラルヒストリー総合研究会で講演を依頼され、ようやく1997年の出来事に向き合うことができた。その頃から私は、試行錯誤で人に話を聞くことを再開した。そのなかで、まず「尋ねる」のではなく、話を「聞く」ことにつとめた。それまでたくさんの人に話を聞いてきたにもかかわらず、「聞く」ということについてよく考えるようになったのは、この頃からのことであり、「聞く」ことは、文字通り、「耳を傾ける」「耳を澄ます」ことだということがわかったのもこの頃のことだった。

今では、人に話を聞くときに、人の話に意識を集中するようになった。そうしてみると、以前に聞き取りをしていたときのいくつかの場面が苦い経験として蘇ってきた。そのひとつが冒頭に紹介した都留市での場面だった。その女性の話に難点があったのではない。そうではなく、訳知り顔の言い方は、はからずも、私が話を聞くことができていないことを吐露するものにほかならなかったのであり、その女性を傷つけることを言ったことについて、とても申し訳なく思っている。

聞き取りでは、一般的に、人に尋ねたいことがある。人に尋ね、そのことでわかることも少なくない。だが、今の私は、尋ねることよりも聞くことに意識を集めたい。どのような話にも、どんな話し方にも何か理由があるはずであり、先の女性は、気になることがあったので、同じ話にもどったのだと思われる。「耳を傾ける」「耳を澄ます」ことで聞こえてくることが必ずある。今の私はそのことが大事だと思っている。（横浜国立大学教授）

聞いて、書く。

青井　のな

「これは黙っていなければいけないことなのだろうか？」と思うことがよくありました。それほどに聞き書き集への「掲載を辞退」される方が多かったのです。それは、私が主に遊廓や特殊飲食店の周辺をテーマに聞き書きをしていたことと無関係ではないかもしれませんが、お蔵入りした原稿がいくつもありました。残念無念としか言い様がありません。

遊廓の近くで薬局や飲食店を営んでいた女性は、常連のお客様でもあった娼妓たちをとても好意的に語ってくださいました。また、赤線廃止後の地域に住んでいた女性は廃業後の「おかあさん」たちの逞しく大らかな様子を生き生きと語ってくださいました。活字になることを前提にお話しいただきますが、それが活字になったとたんに掲載の許諾を頂けなくなるのです。たとえ内容が家業や軍での勤務体験など、ご自分やご家族のことだけだったとしても同様で、「実は主人が養子なので」という理由で辞退された方もいらっしゃいます。当初は「隠さずにもっとオープンにしても良いと思う」と、聞き書きに理解を示してくださった方にも躊躇されてしまうことがありました。不都合な箇所を割愛し、表現を変えたりして再度お願いしますが、最後には「ごめんなさいね」と言われてしまいます。

「ひと様のことは言わないほうが無難」、あるいは、「身内の恥をさらすことになる」などと思われるのでしょうか。活字になったものを読んでみたら「気軽にいろいろ話しちゃったけど、やっぱり話しすぎちゃったかしら」と思われるのかもしれません。ご家族の反対があったのかもしれません。「この内容のどこがだめな部分なのだろう？なんで？なんで？」と思うこと自体、私が第三者であるということなのです。話者にとっては、なんらかの差しさわりがあると判断された結果なのだから、と泣く泣く諦めたものです。

もちろん私の聞き方やまとめ方に問題があったのかもしれませんが、何よりも、幾度も足を運んで得たものではない以上（幾度もではご迷惑かもしれませんが）、信頼関係が不成立だったことも大きな原因だと思います。しゃべったことはそれっきりですが、活字になってしまうと、いつどこで誰に読まれるかわからないわけですから、話者にしてみれば慎重になって当然です。大きな耳と柔らかな心があれば、大抵のことはお話しいただけるのかもしれませんが、その先のハードルを越える難しさを痛感しました。

「聞き書き」は発掘作業に似ていると思います。うずもれた貴重な宝物を丁寧に探し出す作業です。しかし、その宝物は化石や文化財と違っていわば「なまもの」ですから、取り扱いにはより細心の注意を払わなければならなかったのです。それが十分であったなら、もう少し多くの貴重な体験を活字に残せたのかもしれません。

私が「聞き書き」をするのは、活字になれなかった言葉たちを探したいからでした。どこにも書いていないこと、文献からはわからないことを知りたいからでした。誰にもしゃべっていないことを教えてほしいからでした。つまり「あなただけが知っていることを教えてください」と言っているようなものです。あなただけが知っていること―「聞き書き」は、だから価値があると思うのです。その価値あるものを事実として歴史の中に位置づけていってこそオーラルヒストリーなのかもしれませんが、私の場合は、未だ「聞いて、書いて」が精一杯で、その先へ行けずにもがいています。

「聞き書き」の名前は実名？　仮名？

石崎　昇子

私はオーラル・ヒストリー総合研究会の創立時の世話人メンバーである。2003 年 1 月 31 日の社会学者中野卓氏による創立講演会の時は、武蔵野市に住む氏をお迎えにいき文京区の会場までお送りする役目であった。氏は奥様ご同行。この日は寒い日だったせいか奥さまが時々トイレに行かれるのでその都度タクシーをとめて場所探し。時間までに会場につけるかどうかひやひやし時間直前に滑り込んだことを今も鮮明に覚えている。講演の後の質疑応答では「聞き書き」を実名で記録するべきか仮名でも良いかが問題になった。社会学の中野氏は仮名でもよいということだったが、私は、女性史は史実を実証する必要上実名で記録するべきだと考えていた。

会で発足した 2003 年ころ、私は杉並区の母親運動のビラなどの史料整理と同時に運動にかかわった人の聞き取り調査を行っていた。それに基づく「聞き書き」は、当然のごとく実名で書いた。これは 2007 年に『女性と地域の活動―杉並母親運動の史料から』として『冊子』にまとめた。次に 2009 年 2 月からは西東京市の女性史を編纂する会の『聞き書き集』編纂に講師としてかかわった。これは自分たちも街づくり活動を行う NPO 法人生活企画ジェフリーの数人の女性が主導しながら、かつて地域で街づくりに活躍した女性たちを中心にした「聞き書き」集である。具体的には西東京市で戦後初めて市会議員となった女性や初めて議会議長になった女性たち。彼女たちは、「女のくせに」と言われながら男性社会に伍してきた。聞き手もジェンダーフリーの世の中をつくろうという明確な問題意識があり、その活動をよく引き出した。当然、名前は実名で学歴も書き、大きな顔写真も入れた。

一方、私はこの会が始まった 2003 年ころから大学で女性史を講義するようになった。そして、単位認定のレポートの課題のひとつを「祖母の聞き書き」をしてもらうことにした。やり方は祖母の生い立ちから現在までのライフ・ヒストリーを A4 のレポート用紙 4 枚くらいにまとめるものだ。インターネットの発達した現在、「女性労働とジェンダー」といった課題を出すと、コピペといってインターネットに出ている文章をコピーし、貼り付けて同じようなレポートをつくるからである。そこで、「祖母の聞き書き」は「世界にひとつしかない、あなただけのクリエイティブな作品」、「オーラル・ヒストリーは今いろんな分野で隆盛で学会もある。インタビューを一度経験すれば将来役にたつ」などと学生を煽動し、授業中に 30 分くらい「やり方」を説明。聞く内容は、生年月日、育った家庭環境のこと、戦争経験、受けた教育や就いた仕事、結婚、子育てなどの家族生活、社会的活動、嬉しかったこと、辛かったこと、孫に伝えたいことなどである。だがこれだと学歴や職業調べみたいだと祖母が嫌がるという学生もいたため、祖母の名前は仮名でも良いことにした。学生の「聞き書き」を使って私が歴史を叙述することはないからである。すると、地域女性史で私たちが聞く以上にわかりやすい「良い」聞き書きが出てくるのである。

私が行っている学校の学生の祖父母世代の 8 割方はあまり豊でない農民家族の出身であり、一家総働きだった子ども時代や義務教育をおえるとすぐ女工になった話も出てきた。祖母の名前が実名か仮名か私にはわからないが、学生は祖母のことを概略は知っており、学生と祖母の間には信頼関係があるから何でも話せるのだろう。祖母は自分の人生を孫に

一生懸命伝えようとする。戦争の経験も必ず話される。学生はその具体的経験をよく理解し、わかりやすい聞き書きを創るのである。祖母のことはなんとなく知っていたが詳しくは知らなかった祖母の歴史がたくさんあることに驚き、こうした機会を与えてくれた先生に感謝すると学生が書くのもうれしい。

私は1990年代に、「女工」と呼ばれた女性が結婚などして多く住むといわれる江東区の女性史編纂にかかわった。そこで、「女工」経験のある女性、または母親がその経験のある人の「聞き書き」を採ろうとしたがうまくいかなかった。編纂委員の親戚でその人を信頼している女性が一人だけ、自分の母親は東京モスリンで女工をしていたと語っている。女性史編纂のさい「女工」は差別用語だから使わないでほしいという自治体もあるくらいだから、多くの女性は母親が「女工」だった「過去」は語らない。

学生たちの「祖母の聞き書き」を読んで感じることは、地域女性史の聞き書きは文字に残ることの少ない無名の庶民女性の話を残そうとしているけれども、実際に話をしてくれるのは他人に語りそれが読まれることを承知している人たちが多く、もっと裾野の庶民女性の具体的な話はあまり聞かれていないのではないかということだ。私が編纂に参加した『江東に生きた女性たち―水彩のまちの近代』(ドメス出版　1999年)を史料にして、都市部の労働者家族の形成について『歴史のなかの家族と結婚』(森話社　2011年)という本を書いた。だが、『江東に生きた女性たち』に掲載された1920年生まれの話者を中心とした「聞き書き」では、話者が育った家庭の父親が職人や労働者ということはわかるけれど母親が結婚前に就いていた職業やどう暮らしていたかなどは聞かれていなかった。都市部の労働者家族は具体的にどういう層が形成したかをみるためには、話者の母親が結婚前にどんな職業に就いていたか、どんな状態にあったか等の話が必要だが、それを聞いていなかったのは残念なことだ。

地域女性史で「聞き書き」の話者を仮名にすることは、たとえば貸座敷を経営した女性たちの事例としてこれまでにもなかったわけではない。仮名だからといってその話が「信用」できないわけではない。裾野の庶民女性たちにコンタクトをとる困難はあるが、より深く女性史を叙述するためには、話者を仮名にしても良い場合があるのではないかと、今は思っている。

オーラル・ヒストリーを考える

戸川トモ子

○聞き取りの活動を通して

区の公募で千代田区女性史編集委員となった 1996 年から地域女性史の活動を始めた。その時初めて、地域の女性の歴史をたどるために、聞き書きを知ることとなり、それ以降継続している。

テーマを決めないで話者の生涯を聞く際には、話者の生まれてからの時代背景及び地域のようすなどを調査して、聞き取る側が質問事項をはっきりさせておくなどの事前準備を入念にしておくと、気持ちの余裕もできて、スムーズな聞き取りができる。

テーマが決まっている場合には、聞き取った話を区内の地域毎に聞き比べることも面白い。地域の傾向が浮かび上がってくることもあるので、興味深い。

近年、高齢者への傾聴のことも取り上げられることが多くなってきた。広辞苑によると、傾聴は、耳を傾けてきくこと、熱心にきくこととある。その人のかけがえのない人生の話をきくことは傾聴と聞き取りとでは共通するが、私たちの聞き取りでは、話を聞く側だけではなく、話者自身にとっても、話すことで自分を再発見し、従来の価値観と現在を比較するなど、女性である話者が主体的な生き方を意識していくようにと考えて活動している。

○オーラル・ヒストリーと地域女性史の聞き取りを考えてみて

オーラル・ヒストリー（oral history）とは、口述歴史(史料)《歴史上の出来事に直接参加した人に面接してテープ録音したもの》（シニア英和辞典）である。公開を前提として聞き取りをして、そのテープ自体が史料である。

一方、日本の地域女性史では、聞き取りそのものは公開を目的としたものではなかった。女性史の視点でまとめることを前提として聞き取りをしてきた。聞き取りのテープ起こし原稿は、話者の語りを全部文字に起こしているが、それは素材であって、聞き書きとして最終的にまとめたものは、話者の語りを忠実に全部再現しているものとは異なってくる。生の聞き取りのテープ、それが即、地域女性史そのものでもない。しかし、聞き書きとしてまとめた後のテープは、その後の活用も何も決まらないままに、貴重だからとの理由で保存してきた。だが、近頃、聞き取りから 15 年以上も経過したカセットテープに対して、現実的な見直しが必要であると痛切に感じている。テープのデジカル化なども検討課題となってきた。

今後、地域女性史としてインタビューする際に、公開を前提として話者に承諾を得、聞き取る側の確固たる視点とインタビュー技術の研鑽などの事前準備を周到にして、音声やビデオで録音、録画することは第一段階として実行可能であると考えられる。第二段階として、保存、公開して活用するには、そのための施設設置が前提となり、それは単一のサークルの活動ではかなり難しいと感じている。複数のサークルの連携か公的機関での設置が妥当であるとの印象を持っている。同時に、それらが活用されるためには、オーラル・ヒストリーの分野での地域女性史の歴史的資料としての価値なども検討を要する。新しい試みとして実現すれば、地域女性史がより多くの人に史料として広まる機会となり得るのは確かである。

オーラル・ヒストリーの蓄積は歴史の書き換えにインパクトを与えたか？

平井　和子

オーラル・ヒストリー総合研究会が発足した当初から、世話人として関わらせていただいてきました。近年は、多忙を極めて、世話人から外れさせていただいていますが、都合がつく限り、例会などに参加したいと思っています。

会発足の2000年代初めは、1990年代の韓国の元「慰安婦」女性たちの名乗り出によって、無名の個人の証言が、歴史の中で不可視化されてきた重大な事実（「戦時性暴力」「女性への戦争犯罪」）を浮き上がらせたという衝撃とともに、「歴史」の中に埋もれてきた女性たちの声を記録する」と自ら任じてきた日本女性史研究が改めて自分たちのオーラル・ヒストリーのあり方を厳しく問い始めた時代だったと思います。ほぼ同時期、オーラル・ヒストリーを学問として掲げる御厨貴氏が、その定義を「公人の、専門家による、万人のための口述筆記」（『オーラル・ヒストリー』中公新書、2002年p.5）とされたことに対する、地域女性史研究者たちからの異議申し立ての思いもあったように思います。また、会発足の翌年だったか、来日されたオーラル・ヒストリーの第一人者、ポール・トンプソン氏を迎えて、ワークショップを持てたことは、折に触れて思い出される貴重な体験となっています。

本研究会は、オーラル・ヒストリーの方法論や優れた実践報告をしていただくと共に、東京を中心にした近隣の地域女性史研究会の活動報告の場ともなってきました。これらの報告や全国各地の取り組み、そしてわたし自身が関わっている静岡県下での女性グループなどによるオーラル・ヒストリーの地道な蓄積は決して少なくないものです。しかし、残念ながらそれらの蓄積が未だに「歴史」を書き換えさせるような力を持ち得ていない、とも思っています。それどころか、「女たちも（家族を支えるために）がんばりました」「夫と二人三脚でがんばりました」といった近代家族的ジェンダー役割を補強する文脈の中に位置づけられてしまいがちであることに危惧を抱いています。「歴史」の書き換えのためには、ジェンダー視点を大事にする者が、自治体史編纂などに参入して行くことも重要ですし、またオーラル・ヒストリー実践にあたる聞き手の側がジェンダー視点や歴史認識を鍛えていくことも不可欠だと思います。

オーラル・ヒストリー総合研究会は、このような課題を共に追究して行く場としてこれからもますます重要な意味を持つと思っています。

オーラル・ヒストリーと私

折井美耶子

オーラル・ヒストリーという言葉を私が始めて意識したのはいつだったでしょうか。多分『歴史学研究』が特集した「オーラル・ヒストリー—その意味と方法と現在—」(1987年6月号)を読んだときではなかったかと思います。永原和子さんが「女性史と聞き書き」(下線は筆者)という報告で、生活史や地域女性史、戦争体験などの聞き書きについて述べています。しかし澤地久枝や本多勝一の業績をオーラル・ヒストリーとして取り上げての座談会があり、この時点では、聞き書きではなくオーラル・ヒストリーはまだ自分の課題として迫ってきてはいなかったような気がします。

○　「地域女性史」と『歴史評論』

地域女性史での私の聞き書きは、『多摩の流れにときを紡ぐ—川崎女性史』(1990)、『新宿　女たちの十字路』(1997)、『里から町へ　100人が語るせたがや女性史』(1998)、『江東に生きた女性たち　水彩のまちの近代』(1999)、『東京タワー、伝統と先端の街　聞き書き　みなと女性史』(2008)などで体験し、単行本として出版はされず冊子でしたが、『調布の里ものがたり』(1999)、『三鷹の女性史』(2003)、のちには『平塚ものがたり』(2012)などにも関わりました。

それより以前、『歴史評論』が女性史特集として戦前から婦人運動に関わった女性たちの聞き書きを行った際、記録担当として参加したことがあります。帯刀貞代「私の女性史研究—婦人運動のなかから」(1972年7月号)、丸岡秀子「生活と思想の軌跡」(1977年3月号)、山川菊栄「山川菊栄氏に聞く—日本におけるマルクス主義婦人論の形成過程」(1978年3月号)、「市川房枝氏に聞く—私の婦人運動—戦前から戦後へ」(1979年3月号)で、この4人の聞き書きはのちに『近代日本女性史への証言』(1979年10月、ドメス出版)として出版されました。

○　イギリスで

私がオーラル・ヒストリーを自分のこととして考えるようになったのは、2011年1月、総合女性史研究会(現学会)例会で、イギリスから帰国した酒井順子さんのオーラル・ヒストリーについての報告を聞いてからです。もっと詳しくイギリスのオーラル・ヒストリー事情と音声資料の保存について知りたくて、7月にイギリスに出かけて行きました。主な訪問先はブリティッシュ・ライブラリー、帝国戦争博物館、エセックス大学のクオリデータ・アーカイブでした。

イギリスにはオーラル・ヒストリー学会があり、大学では正式にカリキュラムに入っている、また帝国戦争博物館は国立であり、オーラル部門には戦争に関するあらゆる体験が聞き書きとして残されており、整然と分類・保存されていました。そしてインタビューアーの養成も行われているとのことでした。またブリティッシュ・ライブラリーでは、250万ものサウンド資料が残されていると聞いてびっくりしましたが、それには自然の音、文学の朗読なども含まれているとのことで、オーラル・ヒストリーはその5%くらいとのことでした。しかし5%でも12500人でしょうか。著名人はもとより、芸術・産業・労働などいろんな部門のグループのライフストーリーを集めてもいるとのことでした。日本では国会図書館が、政治家の聞き取りを保存していると山口美代子さんに聞いたことがありま

すが、女性は市川房枝ただ1人とのことです。日本の実情とあまりに違うのにカルチャーショックを受けました。

この年の 8 月出版した『地域女性史入門』のなかでこのイギリス事情を紹介し、「さしあたってオーラル・ヒストリー研究会のようなものでも希望する人を募って立ち上げて、方法論など研究できたらと、帰国の飛行機のなかで考えた」と書きました。

○　オーラル・ヒストリー総合研究会

そしてそれが実現に向かって歩きだしたのは、その一年後のことでした。2002 年 10 月酒井さんの先生であるポール・トンプソン氏を迎えて「オーラル・ヒストリー・ワークショップ」を開催する予定でしたが、トンプソン氏の来日が急遽延期されて、その日集まった人々から「オーラル・ヒストリー研究会」の結成が提案されて、その準備委員が選出されました。翌 2003 年 1 月「オーラル・ヒストリー総合研究会」(名称に総合が加えられた)の結成式が行われました。3 月にはトンプソン氏を迎えてのワークショップが行われ、各地で地域女性史などに携わっている 5 人の女性に報告をしていただき、トンプソン氏は「発表されたプロジェクトはそれぞれ重要であり、・・ヨーロッパのオーラル・ヒストリーに近い」とコメントし、私たちの聞き書きを評価してくれました。(『Oral History Workshop News』創刊号参照)。

○　日本オーラル・ヒストリー学会

さらに日本オーラル・ヒストリー学会（JOHA）の結成も同時並行的に進行しました。2002 年 11 月、政策研究大学院大学主催の「21 世紀のオーラルヒストリー」が行われ、そこで海外での学会で知己となった酒井順子さん、中尾知代さん、吉田かよ子さんなどの研究者が再会し、学会を立ち上げる話がでて準備会が始まり、私も参加していました。何回かの準備委員会ののち 2003 年 9 月 23 日、中央大学後楽園キャンパスで設立大会が開催されました。記念講演は来日したローリー・マーシェさん（アメリカ、オーラル・ヒストリー学会会長）とジャクリン・ギア＝ヴィスコヴァトフさんで、アメリカのオーラル・ヒストリー事情が少しわかったような気がしました。当日の第一分科会で私も「地域女性史と聞き書き―東京地域を中心に」というテーマで報告をいたしました。まだ自分のしてきたことを「オーラル・ヒストリー」と名づけることにはためらいがありましたので、タイトルは聞き書きとつけました。(『日本オーラル・ヒストリー研究』第 9 号、吉田かよ子さんの「設立大会を振り返って」参照)

○　10 年のあゆみ

このオーラルに関する二つの会の結成に参加してから、早いもので 10 年も経ってしまいました。その間、私自身オーラルに関して理解が深まったでしょうか、成果をあげてきたでしょうか。考えるとその遅々たるあゆみに忸怩たる思いがします。オーラル・ヒストリー総合研究会は女性史関係の人々が主流で、お互いに経験を出し合い議論し、あるいは大門正克さんや清水透さんなどの講師を招いての勉強会を重ねてきました。初期のころには「ジェンダー・戦争・記憶」を共通テーマとして調査・研究をすすめよう、といったことも提案されましたが、特筆するような成果はなかったと思います。

宮崎黎子さん・生方孝子さんと私の 3 人で『橋浦家の女性たち』(2010) をまとめたことがささやかな成果だったでしょうか。第 21 回例会（2011）で報告させてもらい、みなさんからご批判などをいただきました。聞き取りと手紙を素材に構成したこの本は、当日

のコメンテーターの江刺昭子さんが「せっかくの素材を存分に生かしたといえるのか」と批判した通りかもしれません。重信幸彦さんは「(文字のことば、声のことばという位相の違う) ことばとの向き合いかたを改めて考えさせてくれる」とコメントしてくれました。確かに無理に「オーラル・ヒストリー」と名づける必要はなかったかもしれません。橋浦時雄、泰雄、はるといった著名な人たちを生み出した一族のファミリー・ヒストリーであり、私たちの意図としては、目立たないけれど彼（女）らの背後でしっかりと地に足をつけて生きた人々がいたことを描きたかったのでした。力不足のため、不十分だったと思いますが、共同研究・作業は楽しかったといえます。

一方 JOHA は、現在 10 年を経て会員数は 250 名にも及び、学会としての地位を確立したといえるようです。ただしオーラル・ヒストリーは想像以上に多分野の人たちが用いており、医療関係、人類学、民俗学、新聞・雑誌・放送などのジャーナリストなどなど、そして JOHA では社会学・社会史関係の人が多く参加しており、歴史学関係者は少数です。当初戸惑うこともあったのですが、学ぶことも多くまた若い研究者たちの熱気に触れて、元気をもらったような感じでした。初期に理事として活動したのち退任し、一会員として在籍しワークショップなどに参加していました。2011 年から帰り新参として再び理事になり、研究活動委員会で楽しく仕事をし、第 10 回大会の記念テーマセッションを「日本のオーラル・ヒストリーの源流をたどる—地域女性史の歩みから」と題して伊藤康子さんを招いたことなど、日本のオーラル・ヒストリーの歴史のなかで女性史、なかんずく地域女性史が果たした役割をこのように位置づけることが出来たのは幸いでした。
いまは宮崎さんに理事をバトンタッチして、私は「老兵は隠居」の気分です。

○　あらためて、オーラル・ヒストリーと私のこれから

10 年経ってオーラル・ヒストリーのことが少しわかってきたと思っています。「聞き取り」は話者の語りですが、聞き手の力量によって聞き取る内容に大きな違いがでてきます。「聞き書き」は話者の話を記録し文章化しますが、書き手（聞き手）の意図が反映されますし、その意味で聞き書きは話者と書き手との共同作業だと私は前から書いていました。その過程で語りを個人的なことから歴史の中に位置づけることにより、話者は自分の人生の意味を知り、書き手も歴史認識を深めることが出来るのではないでしょうか。では「オーラル・ヒストリー」はどうでしょう。「聞き書き」も話者の「ライフ・ヒストリー」としてオーラル・ヒストリーの範疇に入れてもいいと思いますが、「語り」「記録」を分析・研究し体験を「歴史化」していくことが本質ではないかと考えています。

ポール・トンプソンは『記憶から歴史へ』のなかで、「すべての歴史は最初は口述であった」と書き、また「女性史の分野でも、オーラル・ヒストリーの可能性は限りなく大きい」それは「女性の尊厳を再主張することであり、先祖の女性の沈黙を破ることである」と書いています。この言葉に勇気づけられて、「日暮れて、道遠し」の感がある今の私も、もう少しがんばってみましょうか、と思っています。

『橋浦家の女性たち』を編んだあとに

生方　孝子

オーラルヒストリー総合研究会の研究テーマとして、「占領期の女性たち」と「家族」があげられ、聞き書きのチームが動き出しました。

たまたま仕事で知り合った作曲家の岡田京子さんが、ダラスの知り合いのところへ遊びに行ったと、楽しい写真を見せてくださいました。話をうかがっているうちに、その人は戦後占領軍に勤めていた男性と結婚し、今はダラスに住んでいるというのです。そのうえ、あの民俗学者の橋浦泰雄の長女であるというのです。早速インタビューを申し込み、日本にいらしているときに何回かお話をうかがいました。

はじめるにあたって私が漠然と持っていたのは、いわゆる戦争花嫁というものに対するステロタイプな概念でした。けれど泰子さんは苦労談を語ることはありませんでした。代わりに語った、芝居の道に進んだ泰子さんの青春は実にイキイキとしていて、物のない貧しい時代でも、戦争が終わったというだけで輝かしいものでした。

なぜ泰子さんはロビンソンと、結婚したのか、それはうかがってみたいことでした。「彼は何でもよく知っていて、ジェントルマンだった」。

日本の男たちとの比較を泰子さんは語りませんでした。けれどもボーイフレンドの家に遊びに行った時、寒いので上着を着たまま挨拶したら、たしなめられたとか、おそうめんをゆでて御覧なさいと言われて、びっくり水を入れることがわからなかったとかの話は、窮屈だったに違いなく、家の中のおんなに期待されているものを語っていました。私の友人が結婚するとき、着物を本たたみして御覧なさいと言われた話を思い出しました。花嫁道具をご近所に披露して、タンスの中まで見せた人もいます。結婚は今でも家の嫁になることと考えられています。分けても長男との結婚は。

戦時であろうと、戦後であろうと、一人の人生は１回限り、待ったをかけるわけにはいきません。たまたま知り合ったのが、占領軍の人（軍属でしたが）でも、迷わず進んでいった泰子さんはすてきだと思いました。

その後に現れた障害も、自分の選んだ人だから乗り越えられたのだと思います。夫となるロビンソンにしても妻の父親が共産党員であることで、職場でこうむる不利益は承知の上でしょう。結婚についてあとで報告された父泰雄にしても、「アメリカは好きではないが…」と認めています。何とも見事な成熟した人びとです。

時代を超えて生きるものがある、時代に制約されない個人の生き方がある、自分の至らなさを時代や環境のせいにはできないと改めて思いました。

一緒に本書を編んだ折井美耶子さん、宮﨑黎子さんと、月１回の会議を重ね、新しい事実がわかるたび、感激したり、考えたり、ルーツの地である鳥取を訪ね、お世話になった方がたとの触れ合いも楽しいものでした。魅力的な方に会え、その生き方に触発される聞き書きの旅はやめられないと思いました。

聞き取りからオーラル・ヒストリーへ

宮﨑　黎子

聞き取りの魅力を知る

『葦笛のうた―足立・おんなの歴史』（1989 年、ドメス出版）が私にとって女性史の出発点だった。一時期、行政と市民が協力して地域の女性史を発刊するという一連の動きが全国的に見られたが、その流れの先駆けだったと思う。市町村単位の自治体としては最初の試みだった。まったく恥ずかしい話だが、自治体主催の女性史講座の受講生募集記事を見た時は、女性史という言葉から紫式部や清少納言をイメージし、平安時代の女性の活躍の歴史をたどるものだろうぐらいの認識しかない私だった。

受講後、自ら、資料を探し、聞き取り作業にあたるという手探りの４年間に、庶民の女性についての記録はほとんど残されておらず、話を聞いて書きとめること、聞き取りが不可欠であることがわかり、続けて行く中で、その魅力にとらえられて行った。

「一人ひとりの人生は１冊の本にまさる…！」と、聞き取りのたびに感じたが、当時の私には、大きな発見のように思えた。聞き取りを通して、話し手の人生に触れることから、エネルギーをもらい続けていたと思う。

オーラル・ヒストリーと出会う

『葦笛のうた』発刊後、自主グループとして、再スタートした。『葦笛のうた』には年表がついていない。是非とも自力で年表作成をと図書館通いが始まった。しかし、作業は遅々として進まず、そうこうするうちに、メンバーがひとり去り、ふたり去りで、数人が残るだけとなってしまった。あと一息というところまできていたのだが、その先に進めず、中断したままになってしまった。聞き書きと並行して年表づくりを続けていかなかったのが、つまづきの最大の要因だったのではないだろうかと思っている。専門家も指導者もいない中で、女性史を続けて行くためには、聞き取りを通じて、話し手との関わりの中で、エネルギーをもらうしかなかったのだが、それに気づかずエネルギーも情熱も枯渇していった。

自らの非力を知り、考えあぐねていた矢先に、オーラル・ヒストリー研究会立ち上げの話を折井美耶子さんから聞いた。自主グループの活動が中断したままになって、10 年が過ぎていた。まさに私が求めていたものだと思った。

2003 年、研究会発足の年の 9 月に、エディンバラで日本の女性史についての「学会」があると聞いて、野次馬参加をした。後に当研究会の会員になった富田裕子さんがイギリスの女性研究者とともに組み立てた学会である。イギリス、アメリカ、オーストラリアの学者の報告に加え、研究会の会員の何人かが報告をした。

報告者のひとりであったピッツバーグ大学のヘレン・ホッパー教授が、加藤シヅエ研究を通じて私の友人と知己であったことから、紹介され、エディンバラでお会いできたのも、不思議な縁であった。

エディンバラで感じたこと

その学会で、ある報告の後、女性の戦争への加担の問題について、欧米の女性たちはどう考えているのか、気になっていたので、会場から質問したが、ほとんど無反応だったの

が印象に残っている。質問の意味もわからないという様子だった。日本では、その頃、戦時下の銃後の女性の戦争加担が問題になっていたのだったが…。あまりの無反応に、驚いた。そこで思ったのは、彼女たちはいわゆる連合国軍側、それこそナチスなど枢軸国に抵抗する正義の戦争で、しかも勝利をおさめたので、おそらく、戦争協力に何の疑問も持っていないのではないかということだった。その時はそんなふうに解釈し、勝手に納得してしまったが、もっと確かめるべき大きな問題だったかもしれないと今では思っている。その場に参加していなかったドイツやイタリアの女性はどう考えているのだろうか。敗戦国の女性として、共通の認識を持つことができるのだろうか。今も気になるテーマである。

一方、研究会のメンバーとのエディンバラ～ロンドンの旅は愉しい思い出となっている。会報『Oral History Workshop News』第2号に、エジンバラのオーラル・ヒストリーのミュージアム「ピープルズ・ストーリー」を訪れた時の印象記を寄せた。あれから 10 年以上過ぎているが、日本ではオーラル・ヒストリーのためのミュージアムなど夢のまた夢である。

実践としての『橋浦家の女性たち』

オーラル・ヒストリー総合研究会では出発したときから、「ジェンダー・戦争・記憶」を基調テーマに「家族」と「占領期」を各論のテーマとして調査・研究をするという目標を掲げて、共同研究も個人研究もありとなっていた。しかし、どちらかというと、共同研究をして方法論を鍛えようという方に比重がかかっていたように思う。

研究会としての例会の積み重ねとともに、共同研究の試みも少しずつ始まった。何か始めたいと思っている矢先に、生方孝子さんがテキサス州ダラスに住んでいる日本人女性にまとまって聞き取りができるかもしれないという話をもたらしてくれた。テキサスに出かけて、いわゆる「戦争花嫁」であった女性たちに話を聞くという計画である。聞き取りに応じてくれる女性のリストもでき、具体的に日程などを検討しようという時に、この話をもたらしてくださった橋浦泰子さんから「ところで、あなた方、宿をどこにとって、どうやって彼女たちの住まいを訪問するつもりなの？」と聞かれ、車社会のテキサスに徒手空拳で出かけるという状態であることに気づいて、あっけなくこの計画はご破算となった。

ところが、橋浦泰子さんとその妹の總子さんと何度か会って話をうかがっているうちに、このおふたりに興味関心が移って行った。「占領期」と「家族」をテーマに、聞き取りをするのはどうだろうかということになった。姉妹の父である橋浦泰雄は柳田国男の盟友であり、民俗学者、社会主義運動家として知られる。泰雄の妹の橋浦はるは赤瀾会のメンバーであり、第2回メーデーで逮捕された時の、警察官と並んで堂々と歩いた写真で知られた「伝説」の闘士である。しかし、はるの戦後の人生はあまり知られていない。はるの次女の滝澤輝子さんから話を聞けることになり、さらに、晩年のはるの身近にいて、最期まで世話をした泰雄の弟の時雄（無産運動の活動家）の養女橋浦元子さんにも話を聞くことができた。

橋浦泰子さん、總子さん姉妹への聞き取りを始めてからわかったことは、姉妹にとっての父泰雄の存在感の驚くべき大きさだった。それに対して、母あやに対しては、ふたりは父にならってなのだろうか、どこか軽んじているような口ぶりだった。總子さんは「母は父に言い負かされて、よく泣いていた」という。22 歳ものトシの差婚の父母である。だが、

橋浦という一家を経済的なやりくりも含めて、しっかり支えていたのは、あやであることに、姉妹も次第に気づいていった。私たちが聞き取りにうかがっている頃は、すでに、骨折がもとで、認知症の症状が出ていたあやであったが、次女の總子さんが介護制度も活用しながら、あやを支えていた。わたし自身、老いてゆく母を身近にみていたので、ついつい本筋からはずれて、老人介護の制度やノウハウまで質問してしまうこともしばしばだった。總子さんは、どんな質問にも率直に丁寧に応えてくださった。

2004年から聞き取りを始め、東京で行われた「第11回全国女性史研究交流のつどい」に合わせるかたちで2010年9月に『オーラル・ヒストリー　橋浦家の女性たち』を刊行（ドメス出版）することができた。登場していただいた女性たちは一人の例外もなく、背筋のピンと伸びた真っ直ぐな気性の持ち主だった。書名を考えた時、どうしても「橋浦家」を使わざるを得ないという結論になった。家制度を否定する私たちが、書名に「家」をつけるのは避けたい思いも強かった。だが、橋浦の人々の真っ直ぐな姿勢は橋浦の気骨あるいは気風というものが、もたらしたものかもしれないと思うと、その意味では、「橋浦家」としたことも窮余の策ながら、ある意味、当を得たものになったのかもしれないと思う。

また折井美耶子さん、生方孝子さんとの共同作業はたのしかった。編集作業中、しばしば話が脱線したが、その中には、女性史にまつわるさまざまな話から、政治、社会情勢に話が及んで、悲憤慷慨したり、いろいろなヒントや励ましを得たりしたのも、いい思い出になっている。

翌2011年4月の例会は合評会として、江刺昭子さん、重信幸彦さんをコメンテーターにお招きし、厳しくも、温かい批評を得ることができた。また、多くの方から、突っ込み不足を指摘された。オーラル・ヒストリーというのは、もっと書き手の主体性を出してもいいのだというのが、書き終えた時にわかったことで、私にとっては発見だった。それまでは、聞き手は話し手の言葉を虚心に聞き、話し手の真意を伝えることに精力を注ぎ込むこと、それには、聞き手の言葉遣いも含めて正確にとらえ、再現するのが、聞き書きだと信じていた。そのこと自体、実に難しいし、それを追究する道もありだと思う。しかし、『橋浦家の女性たち』のインタビューの後に、「聞き取りを終えて」として、短い感想を付したのだが、書いている時の、一種の充実感、手ごたえは忘れられない。

聞き書きは、話し手と聞き手の共同作業の産物だとは、経験的にもわかっているつもりだが、書くのは聞き手である。話し手にどれほど寄り添ったとしても、話し手と同一化することはできない。そこに、聞き書きを書く者の立場性への自覚と責任が生じてくると思う。『戦場の村』や『中国への旅』など多くのルポルタージュを著した本多勝一や、『妻たちの２・２６事件』や『密約―外務省機密漏洩事件』などの著者の澤地久枝も、ずっと以前にオーラル・ヒストリーを論じる座談会で取り上げられているのを、知った。方法論を学ぶつもりで入ったオーラル・ヒストリーの世界が実は底知れぬ大きな森であり、その広さと、深さを改めて感じている。オーラル・ヒストリーは歴史学、社会学、人類学、そのほか、あらゆる学問分野でもとりいれられている。それらの分野からの知恵にも学びながら、女性史としてのオーラル・ヒストリーを深めて行きたいと思っている。

戦争体験(負の遺産の手渡しのために)の聞き書きを通して

海保　洋子

小平・ききがきの会は、1996年発足の男女混合の聞き書きの会である。同年刊行の『そのとき小平では　市民の語る戦争の記憶』第Ⅰ集から2013年の第Ⅹ集まで、一貫して「戦争体験」を聞き書きすることにこだわってきた。それは小平が、西に立川・横田、北に所沢・入間、南に座間・横須賀へと通ずる軍事交通の要点として、ここが巨大な兵器庫であるとともに、病院や兵舎や研究機関や訓練所をもつ、重要な位置と任務を負わされていた。学童疎開も受け入れたし、空襲もあった。重い体験となった戦争の真実は、決して風化させてはならない。記録として残せば歴史となり、残さなければ歴史にならない。

そんな意図から小平村(町)の出征体験者から、また戦後小平に生活の場を移された市民の方々の戦争体験を聞き取ってきた。第Ⅹ集まで刊行したが、物故による会員の減少などの理由から、会を閉じるにあたり何が聞き取られたのか、特徴を少しまとめておきたい。

［戦争体験別分類］

1　戦場・軍隊(中国・南方・ソ連・その他)

①話者は大正後半生まれ、②男子であれば徴兵検査を受け、応召による出征、③戦場は中国・南方・ソ連方面、④辛かったことに戦場の戦闘はもちろんのこと、古参兵による人権を無視した暴力、⑤南方では栄養失調による多数の死者、⑥ソ連方面は多くのシベリア抑留体験者、⑦「お国のために」日赤従軍看護婦となった女性、⑧「加害者責任から逃げられない」といった重たい事実を背負った元兵士の証言は貴重、⑨話者が昭和生まれでは、徴兵年齢前に、海軍特別年少兵、陸軍特別幹部候補生、陸軍幼年学校等に志願ができ、14歳で兵士となり、戦地へも行き戦死者も少なくない。男子の重い徴兵義務は、「国に忠」とは別に軍隊は「運隊」とも言われ、内心1年でも早く「古参兵」になる道を選択したのだ。

2　軍関係施設・軍需工場勤務・勤労動員

小平にあった軍関係施設として、①陸軍兵器補給廠、②陸軍経理学校、③東部第92部隊(電波兵器練習部隊：現一橋大学・津田塾大学)等があり、巨大な兵器庫であった。さらに武蔵野・三鷹・立川には、中島飛行機製作所をはじめとする飛行機工場や軍需工場が多数存在、勤務者・動員者から多くが語られた。多摩地区もまた「軍都」であった。

3　開拓団・引揚げ

満蒙開拓青少年義勇軍志願者の体験や戦災罹災者による東京都開拓団応募者の敗戦後の逃避行が余すところなく語られた。前者は学校長や学級担任の勧めによる志願であった。

4　空襲・爆撃

20年3月の東京大空襲や多摩地区の軍需工場等を目標とした空襲のみならず、一般人を攻撃目標とした爆撃が昼夜行われ命を落とした人も多い。敗戦の年、日本の戦闘機がB29に体当たりして小平の地に落下、B29の搭乗員死亡の大事件は市民男女共に語っている。

5　銃後女性・学童疎開

農家の食糧供出の大変さ、男子に代わって女子青年団による出征兵士の送迎や遺骨の出迎えなど、出征した夫に代わって農家経営を任された妻、都市部から買い出し部隊が着物など持って物々交換でサツマイモや馬鈴薯など食糧を分けた事、20年妊娠中のある女性は、空襲が激しくなり防空壕に何度も駆け込んで無理をしたため2カ月早い早産に、その赤ち

ゃんはお乳を吸う力もなく2日間の命しかなかった等小さな命程危険に曝されたのである。その一方で、都市部からの学童疎開受け入れの地でもあり、2寺、3軒の個人宅に分宿、食糧難の時代、農家から供出用を回してもらった話も多い。また、戦後市民となった中に学童疎開経験者も多く、食糧難、衛生面の悪さ、帰るべき家が焼失した事等々、少年少女たちに戦争の悲惨さを焼き付け、生涯忘れられない心の傷となった人もいる。

6　被爆体験

広島の旧制中学2年生の被爆体験では、担任の配慮で当日の自宅修練組と建物解体作業組とに分けた結果、後者が犠牲となった。そのため前者は、連日市内の死体処理等に従事したが特有の臭いが今でも忘れられないと。また隣町の国民学校3年生の被爆体験では、爆心地から北西10㌔㍍にあった国民学校から見た原爆の爆発瞬間を「大きいモモの形をした」ものが空に浮かんだと証言。広島市内爆心地近くにいた祖母を原爆病で亡くし、市内の建物疎開に生徒を引率して行った中学教師の父を、後年大腸がんで亡くしている。

7　敗戦・戦後を生きる

敗戦、戦後をどのように生きたかといった問いかけに対しては、戦争体験が尾を引いている例が多く見受けられた。当時国民学校4年生だった女性は、奉安殿の破壊と教科書の墨塗りに対して、大きな衝撃を覚え、物事を懐疑的にばかり見るひねくれ者であったと語る。多くの大人たちは、食べ盛りの子どもを抱えて食糧難をいかに克服すべきかに血ナマコになって闇物資を入手し、生きることに必死であった様子は枚挙に暇がない。軍属だった男性は、戦後警察官として、また看護婦・助産婦資格を持った女性は、助産婦として働いた。教師だった女性は、新制中学の社会科教員として共働きをし、定年まで勤めた。

8　資料：出征兵士・戦没者名簿調査

「小平村の兵士たちの出征数・戦没者数」(Ⅳ集～Ⅷ集)は、地域の神社仏閣にある「忠魂碑」「生還者記念碑」を参考に地域の古老からの聞き取りである。各街道(青梅街道・東京街道・五日市街道等)沿いに地図上に氏名と生還・戦没を○・●印で表記して掲げた。5人出征者を出した例もあり、出征者408人中169人が戦没者と判明。戦死率41.4%とは、驚くべき数字である。敗戦時、小平町の人口1万4000人である(現・小平市人口18万人)。

今後の課題

戦後市民となった大方の人が「東京郊外の小平には、特別な戦争の影響はなかった」と単純に思って暮らしてきた。だが、ききがきの会の戦争体験を通してそのような認識が、いかに甘いものであったか真実を通して教えられるであろう。この度の『小平市史　近現代編』(2013年刊行)でも、ききがき集の戦争体験等が随所に反映され、市民権を得た。

21世紀も14年目に入った現在、憲法改正せずに戦争が出来る極めて危機的状況下になりつつある。戦争は、国家が国民の命を最もないがしろにする国家犯罪であると私は思っている。私たちは、戦後の新憲法を誇りに、男女平等の社会を構築すべく歴史学を学び、職場で闘い、教育現場で教えて来た。戦争体験は被害者であると同時に加害者であるといった負の遺産として次世代へ手渡していかねばならない。そういった意味でも、小平・ききがきの会の仕事は、忘れ去られようとしている戦争体験を身近な地域から掘り起し、「記憶の再生」という市民運動を続けてきた。今後私自身は、女性史の視点で地域を掘り起し、小平市民の歴史として「記録」し、後世に残したいと願っている。

敗戦と引揚―子どもの証言を検証する試み―

武田　陽子

『聞き書き集　小金井の女性たち』2 冊の編纂発行は、歴史に女性を織り込む喜びを共有した。一方の私は、敗戦と引揚の体験を子どもたちにも語っていない。「満州から帰りなさって運がえかった」と言われる度に、恐怖を反芻し震え、生きられなかった人がいるのに運のよい話はできないと子ども心に思った。さらに、一家の生還に関連する史実――太平洋戦争の日本侵略による中国人犠牲者１千数百万人、国土を接収された中国人の憤怒、国策で送られた満豪開拓団婦女子と中国残留婦人・孤児の凄惨――を知り、日本人の荷担責任の自問と中国国土接収業務に関与した国策会社員家族の慚愧が、口をつぐませた。

１０周年記念誌発行が憲法改変への諸情勢と重なり、今こそ私の抱える矛盾と葛藤を越える時だと痛切に捉えることになった。脳裏に埋めてきた記憶――９歳の敗戦から１０歳の引揚まで――を証言として書きおこし、それを自ら検証（①から⑨）する実験を試みたい。歴史用語を用い、紙幅上から参考文献記載を略した。

証言　父は「天津（旧満州）は危ない」と言って１人で赴任し、私は不安で涙が出た。東京柿の木坂の２階から黒い敵偵察機の低空飛行が見えると、１９４４年３月に留守家族は広島県に疎開した。４５年３月、「空襲で疎開荷物は焼けても、安全な奉天（現瀋陽）は何でも揃う」と母から聞くとうきうきして、父（３９）の転勤地奉天に６人（母２９、私８、妹２、弟６、４、９か月）は魚雷や機雷に合わず海を渡った①。

加茂国民学校への通学路で樹木の間に見える満州医科大学病院の不気味な建物に慣れ、水泳訓練で浮く喜びを知った頃、突然に婦女子北支疎開命令が出た。お灸に連れられると、「元気に帰れるから」と父は線香の煙の充満する中で言い、その言葉で父は疎開しないと知り震えた。８月１５日午前、北支疎開列車到着を広大な奉天駅前広場でしゃがんで待つ間、話し声がうおーっと響いていた。その声が突然静まり、呻き声の塊に変わり、ただならない気配に慄いた。父が走り寄り「陛下のお言葉があった。日本が負けた。今から社宅に帰る。支那人の顔を見てはいけない。下を向きなさい」と鋭く指示した。初めて乗る荷馬車から目を上げると、街路樹の横に立つねずみ色の支那服の男の顔にプラタナスの葉影が揺れて映り、初めて間近に見る支那人は怖くなかった②。

敗戦数日後に突然授業中止になり帰宅すると、玄関に父がいて「よく帰ってきた。よかった。ロスケ（ソ連軍）が馬で来た。直ぐ部屋でじっとしていなさい」と命じた。応接間に尾を振り唸り涎を出し足を上げる馬数頭がいて、目が合い強張った。翌夜明け前、押入にローソクを灯して荷造りをする母に驚く間もなく、母子６人はロスケが２階で就寝中に脱出した。靄の中から長身で赤顔のロスケ１人がゆらりと近づくと母にすがり、すれ違いざまに足が震え出し、一軒の社宅に逃げた。その家に合流した父は、ロスケに鞍をつけろと蹴られ左耳が聞こえなかった。ソ連軍司令部から出頭命令が出た父は、ロスケと支那人に連行され、無言の姿は門の向こうの朝靄の中に消えた。心配で体を固くしていると、父は無事帰ってきた③。司令部真後ろにある社宅群で数家族毎の集団生活が始まり、家族の組合せも住む家も始終変わった。ロスケが扉を蹴破り乱入すると、子どもたちは教えられた通りに、女事務員を隠した畳から目を背け、断髪し鍋底の墨を塗った母たちを取り囲み大声で泣いた。ロスケは醤油瓶も奪った。学校は避難民収容所になり、授業も塀の外の遊

びも風呂も中止になり、教科書もなくなり、ロスケや匪賊に襲われるので母から離れてはいけなかった。社宅のご不浄にも寝た避難民に移動指令が出ると、「お産を初めてお手伝いした親子は生きられない」と母は呟き、私は親子の死顔にうなされた。夕暮れに日本人会から帰った父たちは、ロスケがつまづくと音の出る鍋などを家の周りに並べた。「ロスケだ」と合図があると、息で凍った布団がガサと音を立てるので身じろぎもしなかった。子どもだけ豆数粒の食卓で、母たちは空腹に見えないのは不思議だった④。「ロスケより恐い八路（中共軍）が来る」と聞くと、行軍を窓から息を詰めて見たが、略奪はなかった⑤。

「国府(蒋介石軍)が来たから、紹介しよう」と言う父に従うと、黄土色の軍服の 7、8 人が軍靴で畳に立ち怒鳴声で話していた。お辞儀をした途端に、1 人の兵士が私の両脇を持ち上げ頭上高くかかげたので、人さらいだと直感して凍りついた。兵士の足元に平伏し拝んでいる父が見え、「あっちに行け」と言う父の声に気付いて立ち上った。「この子は馬鹿で病気で直ぐ死ぬと言ったら通じた。よかった」と父は低く言った⑥。家族連れ国府将校と同居指令が出ると、一家は女中部屋に住み、母は汚物洗濯などを命じられ、男児が泣くとその母親は「日本人、何した、知るか」と怒鳴り母を蹴った。国府に逆らってはいけないので下を向いて我慢し、日本人会から帰る父を待った。「一緒に帰れる」と大喜びする大人の話から、国府から父に出た留用命令が解除になったと知り、嬉しくて身震いした⑦。

４６年七夕の日、有蓋貨車に乗ると母手作りの腰丈までの重い背嚢を床に下ろす指令があり、立ったまま奉天駅を発車した。子どもの用足しは、男が頭上で子どもを手渡ししてさせた。急停車すると旧日本軍兵舎まで急勾配の荒野を歩き、匪賊が襲うから止るなと父は叱咤し、母は背中に背嚢を前に弟をくくり、岩を乗り越える時に父は妹を抱いた。旧兵舎の屋内寝場所は５人に１畳なので１畳半を私が先に取ったが、大柄の女が横取りした。男の使役は線路修理、女の使役は草取りなので、母は弟を背負い私と妹を側に置いて拉致を防いだ。草入り赤い高粱粥の配給は待ち遠しかったが、子どもだけ貰えるお代わりに入れ物を持って行列するのは行儀が悪いと思い、母に促されても並ばなかった。大人は拉致人数を話題にし、ご不浄への暗闇に見張る国府兵に震え、アンペラの上で輝く大きな星を見て寝た。線路が開通すると無蓋貨車にも乗り、急停車すると徒歩避難は続いた⑧。

８月に葫蘆島から空母に乗った。船酔の強い母は、妹の用足し役の私に船内配給の新聞を折切って渡し、訝る私に「落とし紙を忘れましたか。拭くのです」と言って両手で揉みふわふわにした。妹の手をつなぎ、船側に張り出した桟の上の所々に並ぶ鉄板を渡り、鎖の手すりに手が届かないので震え、鉄板に囲まれた穴をまたがせるのに掴まるものはなく、穴のはるか下に海が見えると水葬が頭をかすめ、一人の時より怖かった。お腹の膨れた弟のおむつの洗濯用に、母は配給になる柄杓１杯の洗面用水の残りをもらい集め、私は入れ物で受けた。船上でも日本人会に行く父は、「日本人も揉め事が絶えない」と呟いた。行列の順番に後ろ向きに腰を曲げて肛門を白衣の男に見せるコレラ・発疹チフス検査があり、突然に初めて羞恥心が全身を貫いた。「日本」と叫ぶ大人について行くと、興奮した声の渦に耳は塞がれ、「見えた、日本だ」の叫び声で瞬時に静まり、低い呻き声が起り、太い轟に変わり、長く続いた。私は大人の背中だけ見えた。浦賀港で艀から桟橋に降りると米兵が白い粉を頭と筒先を背中に突っ込んで全身にもかけた途端に、初めて湧いた屈辱感が突き上がった。引揚寮で「お風呂、学校」と聞くと、日本は拉致略奪がないとわかった⑨。

検証 ①大本営発表に拠り父は家族を奉天に呼び、大日本帝国（以下、国）は４５年６月

も国策の満豪開拓団を送出した。②国は、４５年４月の日ソ中立条約不延長通告によるソ連侵攻の危機を隠匿し、５月に本土防衛のために満州の７５％を持久戦の戦場にする作戦を立て、７月に満州在住の４５歳以下２０万人（満豪開拓団員４万７千人）を召集し、ソ連国境や抗日軍出没地に点在する満豪開拓団を無防備状態にして２２万余人の老幼婦女子を残し、８月に「関東軍（満州日本軍）は盤石、国境開拓団は安んじて生業に励むがよろしい」とラジオ放送をした。８月９日のソ連軍侵攻を察知した関東軍は、軍属家族と直ちに撤退し追尾阻止に橋等を破壊し、日本人逃避行の惨酷を著しく増大させた。婦女子北支（満州北部）疎開列車が玉音放送前に予定通り奉天駅を発車していれば、行先非通知・手荷物厳禁の奉天婦女子は満州中部に向け進攻するソ連軍と同じ鉄路上で遭遇し、満豪開拓団婦女子と同じ辛酸をなめたであろう。婦女子北支疎開命令とは、持久戦予定地から婦女子の追放だった。満豪開拓団老幼婦女子１３万余人の死亡は、国の国民保護理念欠落が最大の要因だった。結核罹患歴で兵役検査丙種の父に赤紙はなかった。③８月１９日ソ連軍奉天進駐、東拓（旧東洋拓殖、父勤務）に司令部設置。ソ連軍の連行・釈放を父は「金保有額と帳簿が奇跡的に一致した。通訳に現れたのが東拓で雇った支那人で、全く驚いた。その男がよくやってくれた。シベリヤ行きか殺されていた。ロスケ将校が喜んだからこの男は無害だと証明書を書かせ、兵士に見せたが読めなかった。支那人に唾を吐く蹴る、日本人は酷かった。国の名目は土地買収だが軍がついて支那人に擬をやる。接収だ」と、残留孤児訪日肉親捜しを民間が開始した７４年代に私に話した。④治安壊滅、外交行政機能停止、ソ連兵と中国人暴民の強姦略奪続発、職場は占拠され失職、預貯金凍結、食糧欠乏、物価高騰等の奉天に、日本人避難民が流入した。強姦略奪対策と避難民救済に直面した民間人が、日本人居留民会（通称日本人会）結成交渉をソ連軍と開始し、９月１１日にソ連軍認可を得て事務所を明治ビルに置き、４６年３月１１日ソ連軍撤収後は国府軍管轄下で継続し、４６年１１月奉天引揚完了時まで存続した。日本人会は、身の危険も家族の安全も賭して分区長会（父、分区長）を連日開催し、日本資産徴発搬送に日本人使役調達命令等もある中に、暴力対策、避難民救済（居住手配、食糧衣類燃料補給、治療防疫、孤児保育、死亡者埋葬等）、救済・引揚資金調達（国府政府供与、中国紅卍会寄贈、日本人個人に借用、日本人会寄付等）、満州医科大学でワクチン３５万人分製造、引揚時に身分・退去証明書支給と予防注射接種、引揚第１陣に避難民優先、引揚団毎に医師看護婦配置等を実施し、無私で奮闘した。国が４５年８月１４日に外地居留日本人の現地定着方針を通達時、奉天在住邦人は１５万余人。惨苦の末に奉天に流入した邦人避難民は１１万５千４百余人だった。⑤４５年１０月上旬奉天に中共軍進駐、４６年１月７日撤収。⑥３月１２日奉天に国府軍進駐。アカの軍隊支配終了に危機意識の薄れた父は、童養媳（貧困層等は女児を買うか誘拐し労働力に酷使し、長じて嫁にする）の風習を失念し私を「紹介」したようだ。⑦「留用者報酬５千元のぴんはね前は２万５千元。値上要求は将校の迷惑になる。５千元で家族７人の生活は不可能だと強調し司令部に交渉することと支那人の助言があった」と父はロータリークラブ卓話で語った。⑧アンペラは竹で編んだ薄い敷物。⑨引揚者荷物制限大人１人１貫（３．７５キロ。衣類食糧以外厳罰）、所持金制限大人１人千円。国府軍は乗船前に荷物を地面に広げさせ厳重に検査した。引揚は分区（千人構成）毎の団体行動で帰国まで分区長が責任者。父の分区は、７月７日出発、奉天葫蘆島間３１０キロを３４日要し、８月１０日練習航空母艦鳳翔に乗船し、４１日目の８月１６日に母国に上陸した。

私の試行的実践―1976 年～1990 年～現在―

山村　淑子

私の手許にある『記憶から歴史へ - オーラル･ヒストリーの世界 - 』（青木書店 2002 年刊）の表紙裏には、著者のサインが記されている。その日付は２００３年３月 14 日。オーラル･ヒストリー総合研究会発足後２回目の例会開催日と重なる。この第２回例会は、同年１月 31 日の設立時に同時開催した第１回例会（社会学者中野卓さんを招き講演会実施）に続く例会で、市ヶ谷の私学会館「アルカディア」の一室を借りて開催された。

この日は、一方的にゲストの話しを聞く形ではなく、発足間もないオーラル・ヒストリー総合研究会の会員を中心に５人の実践報告を行い、その結果を叩き台にして、ともに学び合うワークショップ方式で行われた。何れの報告も、各自がこれまで積み重ねてきた聞き取りの実践例を挙げ、聞き取ることでみえてきたこと、発見したこと、さらには聞き取り過程で発生した問題や新たな課題等を提示し、参加者全員がその情報を共有した。ゲストは上記本の著者、ポール・トンプソンさんと、その翻訳を手がけた酒井順子さん。この日、酒井さんは自らの実践も含め翻訳者の立場から報告するとともに、英日双方の通訳も担って大活躍。報告者の一人となった私も、Ⅰ・教育現場での二つの実践、Ⅱ・昭和一桁世代女性との歴史学習会での実践、Ⅲ・自治体史と自治体女性史での実践を報告した。ここでは限られた誌面の関係で、ⅠとⅡの要点を記すこととする。

Ⅰ教育現場での実践

A【祖父母から聞く戦争体験・東京・高２日本史・高２世界史・1976 年 - 1978 年継続】孫世代が祖父母の戦争体験を聞き取る。徴兵され無事帰還できた祖父。東京大空襲で逃げ惑ったが、生き延びることができた祖母。その話の中には多くの「いのち」の終焉とともに、幼い「いのち」が成長(父母世代)し、そこにまた新たな「いのち」が誕生(孫世代)したことも語られた（自ら手記を寄せた祖母もいた）。この聞き取り体験から、孫たち世代は自分自身の「いのち」が、人類の誕生から一度も途切れずに継続されてきたことを発見。その事実に感動する一方、前線で、空襲で、飢餓で断たれた他民族も含めた「いのち」の存在を意識せざるを得なくなる。祖父母の戦争体験で語られた「継続したいのち」と「断たれたいのち」の存在は、若者たちの歴史をみる目を変える契機となる。

B【父母から聞く労働体験・茨城・高３・政治経済・1988 年 - 2000 年継続】本例はバブル崩壊直前の春から崩壊期に実施。「働くこと」を問う息子や娘のインタビューに父母から発せられた回答は、「お客さんからありがとうと言われた時が一番嬉しい」・「苦労して仕事を完成させた時やり甲斐を感じた」・「収穫した米や野菜を美味しいといって食べてくれる人がいる」・「いのちを救うために役だっていると思うと生き甲斐を感じる」だった。若者たちの多くは、父母が働くことに「喜び・やり甲斐・生き甲斐」を感じていたことに驚く。若者たちの多くが、「働くことは辛く、大人たちは生活のために我慢して働いている」と捉えていたのだ。この体験は、「懸命に生きている大人に対する感謝と尊敬の気持」を育み、「新聞折り込み広告で仕事を探す母の姿」に向ける若者の眼差しを変えていった。進路決定を間近に控えた聞き取りは、若者の労働観、人生観を変える契機となる。

Ⅱ成人女性の歴史学習会での実践

A【戦争体験記録作成・北海道旭川・昭和一桁世代女性21名・前期1978年－1984年】
動員で授業が行われず学ぶことができなかった女学生が、戦後33年を経て自主的歴史学習会をスタート。アジア・太平洋戦争の歴史学習では、中国人強制労働の跡地も訪れ、「開戦日・広島原爆投下・終敗戦日」等の聞き取り調査も実施。女性たちは、自らの戦争体験と平和の大切さを繰り返し私に語った。学習会も6年目に入り、記録集『私たちの記録－戦争・平和そして学習－』発刊に向けて校正も最終段階に入ったその時、女性たちの「沈黙」が破られる。それは、兵士となった青年と女学生の戦争への向い方に違いがあったとした私の文章を読んだKさんの一言「何度読み返しても女学生だった自分たちの気持ちと違います」から始まった。「私たちは純粋にお国のために尽くしたかった」「お国のために私も戦いに行きたかった」「女も戦地に行かせてくれたなら鉄砲を担いで戦いたかった」「生まれかわれるなら男に生まれたいと思った」と、「真面目に」、「一生懸命に」生きた女学生たちの熱い想いが次々と語られた。語り終え、時が一瞬静止した後、女性たちに衝撃が走った。

彼女たちは、「大日本帝国憲法」下で男尊女卑を根底においた良妻賢母主義教育を受け、戦後の高度経済成長期には性別役割分業の価値観の中で「企業戦士」の妻として生きてきた。自由民権運動を学習し、「日本国憲法」を通して人権学習も行い、北海道内の戦跡も訪ね戦争の被害と加害の両面も学び、女性たちは平和の重たさを語ってきた。だが、突然破られた「沈黙」は、女性たち自身の人としての尊厳も含め、人権の理念が生活実態と切り離されていたことを明白にしたのだった。個々の生き方が問われ、変革が求められていた。その変革は、最初に「沈黙」を破ったKさんが私に伝えた「解放感」の三語で始まる。「昨日、勇気を出して、はじめて主人を『夫』といってみたんです。そしたら、これまで感じたことがない『解放感』を味わいました。『私』という人間になれたような気がします」。

B【教育体験記録・聞き取り調査・北海道旭川・昭和一桁世代女性21名・後期1985年－1990年】何故、女学生たちは「真面目に」、「一生懸命に」戦争に協力してしまったのだろうか。女性たちは、自らが受けた教育に視点をおいた教育史の学習を開始する傍ら「教育に関するアンケート」調査を実施。自らが歩んだ歴史の検証を行うことになる。各会員が5人の対象者に直接相対し、用意された28項目について聞き取ったものをアンケート用紙に書き入れる方法がとられた。この調査結果で注目されたのは、戦時下の国語教科書に記載された軍国主義教材内容は40年を経ても覚えている人が多く、修身や歴史教科書よりも生徒たちに与えた影響がより大きかったことが明白になったことである(『私たちの記録Ⅱ－わたしたちが受けた教育－』)。

全員の報告を聞き終えたポール・トンプソンさんは、日本の女性史研究者が長年積み重ねてきた多様な「聞き取り」の実践を高く評価。「会報」を発行することと、日本で行われてきた実践を世界に発信することを推奨した。新しい学問分野として構築されたオーラル・ヒストリーは、従来から実践されてきた「聞き取り」とどこが違うのだろうか。さらには、社会学分野でのオーラル・ヒストリーの扱いと、文献史資料での検証を重視してきた歴史学分野でのオーラル・ヒストリーの扱いは異なる等々、次々と新たな「何故」を抱えることになった。関連分野の研究者との交流や、参考文献に当たるなどしても、すっきりしないものを抱え続けている。ともあれ、私の試行的実践は現在も継続している。

聞き取りと写真　―人生最初の写真、最後の写真―

むらき数子

昨 2013 年、東京都の山村・檜原村で、1940 年生れのＨさんと 1979 年生れのＮさんの二人から、40 年隔てたお産の経験を聞き取りさせていただいた（※1）。N さんの 2011 年の妊婦検診の話になった。N さんは、14 回の妊婦検診を病院と助産院とで半々ほどに受け、病院ではそのつどエコー検査（超音波検査）を受けた。

「エコー、最初見たときは、嬉しかったです。最初の（プリントは）保存してます」

そうか、いまどきの子どもの「最初の写真」は、生まれる前の「エコー写真」なのか。

宮内貴久「生殖医療の現状とエコー写真」（※2 宮内）によれば、エコー写真は、1980 年代後半から普及し、普及するにつれて、母子手帳に貼られる診断結果という扱いから、アルバムに貼られたりパソコン内に保存される「超音波による baby の初ショット！！」と位置付けられるようになった、と言う。

2013 年現在、妊婦のほぼ 100％がエコー検査を受けている。日本母体胎児医学会は「少なくとも妊娠中 4 回の超音波検査を実施することを推奨する立場を取っています。」（※3）から、エコー検査を受けていないのは、ごく少数の「未受診妊婦」だけである。

なるほど、10 歳になった孫の「最初の写真」はエコー写真である。祖母となった私には乳児期の写真が無い。

私は 1945 年、敗戦直後に東京の焼け跡で生まれた。私が生まれて育つはずだった家は、「空襲」＝「戦災」で焼失して無かった。写真機もアルバムも焼失した。父が、再び写真機を入手してスナップを撮るまでには、数年を要した。その間に生まれた私には、乳児期の写真が無く、1935～1944 年生れの兄姉たちの乳幼児期の写真を見て育った。

兄姉たちのスナップは、兵士（＝父）が戦地で持ち歩いていた『軍隊手牒』に貼り込んでいた写真、つまり、母が留守家族の無事を知らせるために送った「慰問写真」だった。写真館が写した写真は、親戚などに配ってあったものを戦後に返してもらったものか、複写させてもらったものだった。

1992 年、茨城県猿島郡三和町（現古河市）で町史編さんに関わり始めたとき、たくさんの写真で構成したいと思った（※4－1）。けれども、江戸時代に小さな宿場があっただけの平凡な畑作農村に、アルバムを持つ家は多くはなかった。139 家族分、393 冊ものアルバムを集めた『日向写真帖』（※5）のようにはいかなかった。

昭和一桁からのスナップ写真を貼ったアルバムを持つのは、「お大尽」と呼ばれる家であった。1935 年の正装した産婆が抱いた赤ちゃんの「帯夜祝記念」の写真を話題にすることで、その産婆の息子Ｕさんを紹介してもらい、聞き取りさせてもらうことができた。

同じ旧三和町で、1938 年生れのＴさんが「この赤ん坊が俺だ」と見せてくれたのは、親族の集合写真。出征中の叔父に送るために撮られたと思われる写真だった。

日中戦争開始後の一年間に、「写真慰問」が流行した（※4－2）。集落ごとに集まった留守家族を撮影するカメラマンは、プロの写真館だけでなく、写真道楽の旦那衆だった。焼き付けられた写真は出征中の兵士に送られ、留守家族に配られ、銃後活動として『写真週報』（※6）にも紹介された。

若い時の写真を持たない高齢者は多い。写真といえば小学校の卒業時の集団写真と結婚式の写真、ハレそのものである。日常の労働中を撮るのは嫌がられる。テッサ・モーリス・スズキが言う（※7）ように、家族のアルバムは「家庭生活のクライマックスの瞬間を荘厳で、不朽のものにする」と同時にそこに「不在」の者・アルバムを持たない家族を見えなくする。

撮られる機会の乏しかった人に、「若い頃の写真を見せてください」という一言が、呼び起こす思いがどんなものか、に気づいてからは、気軽に言えなくなった。

町史には、名崎小学校の 1898（明治 31）年から 1960（昭和 35）年にいたる卒業写真を並べて服装の変遷をたどるという構成にした（※4－3）。

町史編さん後 15 年ほど経ってから、旧三和町のＳ氏を訪問した。約束した時間にうかがったのだが、お昼寝中。代わって応対してくださるＳ夫人に『三和町史』の卒業写真のページを見せたら、「あ、私が写ってる！」と身を乗り出してこられた。写真の一枚に、教員として写っていたＳ夫人の緊張が解けて、ライフヒストリーを聞かせていただくことができた。

昨年末、檜原村で訪れた空家の鴨居に「勲八等白色桐葉章」の勲記と軍服姿の若い男性の写真が残っていた。遺影とともに暮らしてきた人は妻だったのだろうか。

幕末、日本に写真が入ってくると、肖像写真を撮るという行動があらわれた。私は、かつて、そうした一枚（※8）を、物珍しさからの土産（※9）と思ったが、「死を覚悟した」行動だったのか、と今になって思う。（※10）

もちろん、写真館に行って高価な写真を撮ったのはごく少数であったが、大日本帝国が戦争を繰り返すにつれて、軍服姿の写真「遺影」が普及していった。遺影を研究してきた山田慎也によれば、岩手県宮守町上鱒沢の長泉寺に奉納されている兵士の遺影写真は日露戦争から始まり、満州事変以後増加して行く（※11－1）。葬儀の祭壇に、遺影を飾るのは、大正期、第一次大戦後からの、財閥・政府高官などの都会の大規模な葬儀の例が知られる（※11－2）。だが、高度経済成長期までは、都会と地方＝農山漁村との懸隔は甚だしかった。農山村の一般の家の葬列には、1958 年になっても遺影はなかった（※12）。

山田慎也は、現在では、遺影は葬儀に不可欠となっており、その後も仏壇やリビングのサイドボードなどに置かれていると記す。近年は、高齢者が遺影用写真を生前に撮っておくようになってきた（※13）。私も、自分が写された写真を気に入ると「これ、遺影にしてもらおうかな」と口にする。

私は、聞き取りを終える時、「ご一緒に写真を写させてください」とお願いする。初対面で緊張していた話者も、話したいことを聞かせてもらい、ときに一緒に笑ったりして、気持ちがほぐれたあとなので、柔らかい表情で一緒に写ってもらえる。数日以内に、焼き付けた写真を同封したお礼状を出し、一週間以内に文字に起こし、年賀状を出すことを自分に課している。菓子折り一つを手土産に、その人の日常に闖入し、思い出したくないことにも触れてしまったかも知れない者として、せめてものお詫びの気持ちである。

昨年末、いただいた喪中ハガキの一枚に「むらきさんが写してくれた写真を遺影にしました」とあった。Ｉ夫人が差出人だった。15 年ほど前、Ｉ家にうかがった時、Ｉご夫妻が

とても良い雰囲気に撮れていた写真を、大きく引き伸ばしてお送りしたことを思い出した。
お線香をあげにうかがうと、Ｉ夫人は「写真というと、校長先生だから、って硬い表情のばっかりだったので、むらきさんの撮ってくれたのを使わせてもらったんです」と言ってくださった。
Ｉ先生を偲ぶ写真として選んでいただけたことは、寂しい中で嬉しいことだった。

【注・参考文献】

※1　むらき数子「東京都西多摩郡檜原村―湯久保で暮らす―」『昔風と当世風』第 98 号、古々路の会、2014.3
※2　宮内貴久「生殖医療の現状とエコー写真」(2012.9.8 現代民俗学会第１５回研究会「現代生殖医療を民俗学はどのように考えるのか」レジュメ)
※3　堀口貞夫（元愛育病院院長、産婦人科医）より 2013 年 9 月 11 日教示。
※4－1　むらき数子「第三章　いきる・くらす―高度経済成長と暮らし―」『三和町史　民俗編』茨城県猿島郡三和町（現古河市）2001.3、p.277－407
※4－2　「名崎村三区（丸山）の出征兵士の遺家族」『三和町史　民俗編』p.314
※4－3　「名崎小学校のアルバム（1）（2)」『三和町史　民俗編』p.304－305
※5　『日向写真帖　日向市史別編』宮崎県日向市、2002
※6　『写真週報』第 86 号、S14.10.11、p。20「読者のカメラ」「銃後より戦地へ」
※7　テッサ・モーリス・スズキ、田代泰子訳『過去は死なない―メデイア・記憶・歴史』岩波書店、2004、p.106
※8　「御書院番頭」に任ぜられた旗本の写真「八木補職 33 歳（慶応 2 年)」(八木豊・八木和子『音無川　八木豊の周辺』1981、私家版、p.9)
※9　川村邦光、「家族写真をめぐる覚書」『待兼山論叢　日本学編』40 号、2006、p.1
「家族や親族への土産ともなり、やがて遺影として用いられる以外は室内に所蔵され・・・」
※10－1　鶴見良行「家庭アルバムの原型」『思想の科学　第五次』№34、1965、p.43
「彼らは、その写真を、明日の生命を知れない者として、家族や知友に遺していったのである。」
※10－2　山本祐策「祭具としての遺影の作成と承継ならびに働き」『八代学院大学紀要』八代学院大学学術研究会 [編].(通号 32・33) 1988.12、p.22
※11－1　山田慎也「近代における遺影の成立と死者表象--岩手県宮守村長泉寺の絵額・遺影奉納を通して 」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 132 集 2006.3、p.287～325
※11－2　山田慎也「遺影と死者の人格　葬儀写真集における肖像写真の扱いを通して」『国立歴史民俗博物館研究報告』、第 169 集、2011.11、p.157 以下
※12『写真で綴る　昭和 30 年代　農山村の暮らし』武藤盈・写真、須藤功・聞き書き、農文協、2003、p。270「出棺」1958.5 長野県富士見町池之袋
※13「「縁起でもない」は過去の話　元気なうちに遺影を撮る人々」『週刊朝日』2008.7.11、p.39－41

結婚風習の聞き取りから見えてきたもの

山辺恵巳子

1977年、八王子に転居した。新しい土地にどうなじんでいったらよいかと思っていた時、出会ったのが「八王子の歴史」、市の婦人センターの講座だった。その中に「郷土史上の女性のあゆみ」という一講座が組み込まれていた。内容は江戸中期の女流俳人松原庵星布（榎本星布）と明治の中期、多摩地区に初の女学校と幼稚園を設立した横川楳子の紹介のみであったが、地域の中で畑作、養蚕を担い、また製糸、機織りの女工として働き生活の底辺を支え続けてきた多くの女性たちがいることを知り、その軌道を辿ってみたいとの思いにかられた。

講座終了後、自主サークルを組み、取り組むテーマの検討をした。活動を始めた 1978年頃、周辺では多摩ニュータウン建設が急ピッチで進められ、開発によって村落形態は崩壊、景観、地域経済、伝統文化、そして人間関係も一変した。地域の慣習が次つぎと姿を消していく時であった。そこで特に女性の生活には影響が大きい「結婚」についての慣習を聞き歩いて書き残そうということになった。これが女性史らしきものに足を踏み入れることになった最初だった。

八王子市は古くは甲州街道の宿場町として、また織物の街として栄えてきた市街地に、戦後の 1955年、61年、64年と3回にわたり周辺の1町7か村を合併した。それぞれの地域には独自の伝統や慣習が根強く残っていた。そのため聞き取り調査は地域、職業なども偏らないように配慮しすすめることにした。調査の対象者は、土地の慣習に沿った結婚を経験した人たちで、34歳から93歳の男女84人となった。

聞き取りは「結婚」という身近なテーマのためか話し手は気楽に応じてくれた。訪問の主旨と協力を依頼する手紙を送ると、地域のことに精通する古老を呼んで場を作ってくれた。話者たちは、民俗調査のハンドブックを頼りに作った私たちの調査項目には頓着せず、子ども時代のこと、結婚前のこと、そして婚家でのこと、家族や一族の歴史を語ってくれた。しかし、聞き取りという手法も初めてで、どう受けてよいかもわからなかった。用意した調査項目を埋めることばかりにこだわっていた。そのため、たくさんの貴重な証言を聞き逃してしまっていた。

話者の思いのままの話をじっくり聞くことの大事さを痛感したのは、農家の 90 歳の男性からの聞き取りの時だった。「婚家での嫁として労働は？」の質問に、老人は土間の方に目をやり、「お蚕さまが来るときゃ、ガキらは土間に藁敷いて寝かせただよ。病気になったからってよ、かまってやることもできなくってなあ・・・」そう言った。

それからかなり長い沈黙があった。何を言ようとしているのか、返す言葉も見つからなかった。

しばらくして老人は口を開いた。その頃、この辺りの農家ではほとんどが副業として養蚕を行い、それは現金収入を得る大事なものとなっていた。蚕が繭を作るまでの期間の忙しさ、緊張感は格別なものであったという。こんな時、子どもが病気になってもかまってやることもできない。医者に見せるお金も暇もなく不幸にも逝ってしまった子、その呵責を一身に負わされるのは嫁（妻）だったという。「嫁はなあ、朝起きると赤ん坊を背中にくくり仕事した。冬は筵を編むわら挿しの時も子どもは背中にいる」ともいう。苦労を共に

した亡妻への思いの全てが、あの沈黙に凝縮されていたのだと思った。沈黙や言葉の襞の中にあるもう一つの語りを聴くことや、文献では伝わらない言葉を引き出すことの妙味と難しさを知ったのはこの時だった。

聞き取りをすすめていく中で、便宜上分けた行政区分では収まりきれない事項もあることが分かった。例えば、歩いて数分の二つの場所で、一方では「どんな苦しいことがあっても里に帰らずどっしりと落ち着いてその家の嫁になるとの願いが込められているブッツアリボタモチ（おはぎ）を婚礼の祝膳に欠かせない」と言い、片方では「とんでもない、ボタモチなんて葬式に出すもんだ」という。不思議に思いつつ取材を重ねていくと、今は開発され平地になっているが昔は二つの地域の間には丘陵があったことが分かった。慣習をたぐっていくことで、昔はどのような地形であったか、どのように川が流れ、峠や街道がどのように走っていたか、生活圏がどうであったかを知る手がかりになるのではないかと思った。特に開発の激しい地域では一考の余地があるように思う。

通婚圏についての聞き取りで、隣の集落とは通婚がまったくないというところがあった。古い昔の水争いが原因だという。裏付けるような記録は見当たらないが、聞き取った証言を頼りに、史実を遡ってみるのも面白いと思った。

また、多摩や関東一円の主に農村では花嫁が婚家に足を踏み入れる前に火を跨ぐ慣習があった。その意味は地域によって少しずつ異なった。女には穢れがあるという観念を土台にして「清め」を意味したり、嫁として使えることの厳しさを示した「火の中に飛び込むつもりで耐える」とか、なかには「魔物が花嫁に化けていないかを見破るため」という民話的な発想もあった。魔物が花嫁に化けて云々と意味づけたのは昭島市の中神地区だったが、昔からこの地域では養蚕、機織りなど女性の生業から得る収入が高い。男以上に働きのある女性への引け目の裏返しが「魔物」という表現になって意味づけられたのかもしれない。女性を「神がかりだ」「鬼だ」「魔物だ」となぞらえる地域ほど女の働きが大きかったのではないだろうか。

このように、婚姻の慣習の調査で得たデータをいろんな角度から眺め、一つ一つの意味づけを丁寧に手繰っていけば、その地域の女性の姿、女性がどんな位置を占め、どんな扱いをされていたのかが見えてくると思った。だが「結婚の風習からみた女性の生活史」のようなものが浮き出てくればと意気込んでみたもののそこまで分析する力量もなく、民俗調査としても不充分なものに終わってしまった。多摩ニュータウンの開発で地形も生活様式もすっかり様変わりし、古い慣習に浴した人もまばらになった今、あらためて積み残した課題の多さを痛感している。

私のオーラルヒストリー

富田　裕子

私とオーラスヒストリーとの出会いは 1992 年に遡る。当時英国のシェフィールド大学で教鞭をとっていた私に、オックスフォード大学の日産研究所所長から突然電話がかかってきた。話の内容は翌年 5 月に同研究所主催の日本学についての英語セミナーで「日本女性史研究の発展と課題」というテーマで報告してほしいという依頼で、日本女性史の分野におけるオーラルヒストリー研究についても言及するようにとの条件も付いていた。同研究所に在籍している大学院生の間でオーラルヒストリーに興味を持ち、修士、博士論文にこの手法を用いたいと希望する学生が増えてきているというのがその理由だった。喜んで承諾したが、提示された条件には頭を抱えてしまった。オーラルヒストリーという言葉は以前にも何度か耳にしていたものの、その研究手段としての有効性を把握していなかったからだ。そこでレスター大学院在学中にお世話になった歴史学の権威、キース・スネル教授に相談してみたところ、英国におけるオーラルヒストリーの発生と発展について次のような教えを受けた。

> 米国では当初著名人の研究のためにオーラルヒストリーの手法が用いられたが、英国では 1960 年代から歴史的記録を残す機会にほとんど恵まれることのなかった一般庶民に関する研究分野でこの手法が使われるようになった。英国初のオーラルヒストリーの学術研究団体 Oral History Society（オーラルヒストリー協会）が 1971 年に設立され、その会員たちが中心となって、まずこの技法を用いた労働史、社会史研究が進められた。1970 年代後半以降は、女性史、フェミニスト史の分野で、その後はゲイ・レズビアン史、移民史の領域でも積極的に使用されるようになった。また 1972 年にエセックス大学のポール・トンプソン（現名誉教授）が中心となり同協会の学術誌 *Oral History*（『オーラルヒストリー』）が創刊された。同誌はあらゆる学問領域に及ぶオーラルヒストリー研究に関する学術論文を掲載するだけでなく、オーラルヒストリーが持つ可能性を追究すると共に進行中のオーラルヒストリープロジェクトの内容紹介や、在野を含むこの研究に携わる全ての研究者に理想的な意見交換の場を提供するようになった。その結果オーラルヒストリーは英国の大学の講義でも取り上げられるようになり、大学生、大学院生の間に浸透し、この手法を用いた学部の卒論、修士、博士論文が数多く書かれるようになった。

スネル先生の的確な説明のおかげでオーラルヒストリーの人気の理由とその効果が理解でき、私は『サンダカン八番娼館』、『あめゆきさんの歌』、『あゝ野麦峠』など聞き書きを中心に執筆された日本女性史の分野に残る名作を紹介することでなんとか日産研究所での報告を無事終えることができた。これを機にオーラルヒストリーの魅力にとりつかれて、当時携わっていた平塚らいてうを中心としたフェミニストの日英比較に関する博士論文の中でもこの技法が生かせないものかと考えるようになった。幸運にも当時健在だったらいてうの長女の築添曙生氏や、奥村博史から成城学園高校時代に演劇指導を受けた臼井毅名誉教授に聞き書きする機会を得て、書物の中には記されていない貴重な情報を入手でき、新しいらいてう像を作り上げることに成功した。

2005 年 3 月に帰国してからはオーラルヒストリー総合研究会に入会し、英国におけるオーラルヒストリー研究の歴史や発展について紹介するチャンスも得た。まずレスター大学の歴史学部が National Lottery Fund（英国政府が宝くじの収益金から文化研究などに

対して資金を提供する）の援助を受けて行った地元レスター地域を中心とした英国中部地方の大規模なオーラルヒストリープロジェクトについて報告した。更にニューズレターに前述したオーラルヒストリー協会で長年に亘って理事を務め、英国のオーラルヒストリーの発展に貢献したランカスター大学名誉教授のエリザベス・ロバーツの研究活動の内容と聞き書きを活かして執筆した主要著書を論じるエッセイを寄稿した。

またジェンダー史学会の国際担当理事に就いてから、英国における女性史研究、文化研究、大学教育に関する問い合わせ、講演並びに原稿依頼を受けるようになった。まず国立婦人教育会館からは同館に女性のアーカイブズを設立するにあたって英国における女性アーカイブズの種類、運営資金、利用者、保管している資料、抱えている問題などを取り上げた論文を執筆した。英国の女性アーカイブズについて記した日本語の資料は皆無に等しい状態だったため、私は現地まで出向き、英国最大の規模を誇るウイミンズ・ライブラリーのアーカイブズの管理者や文書館員への聞き書きを行った。入手した貴重な情報をもとに英国の女性アーカイブズの現状と課題を伝えたこの論文は好評で、同館主催のアーカイブズ講座でも講演する機会にも恵まれた。

加えて海外、主に英語圏の研究者によってどのような日本女性史研究が行われてきたのか、あるいは現在行われているのかを知りたいというリクエストも多かった。それに応えるため日本学研究特に女性史の分野で名高い英米豪の研究者たちに聞き書きをした。その結果は幾つかの大学の女性史研究会で発表した。

更にここ 2・3 年、英国の大学についての多くの質問を受けるようになった。米国の大学に関する書物は多数存在するが、英国の大学のものは少ない。そのためシェフィールド、エジンバラ大学で 10 年以上に亘り専任教員として語学教育、日英比較女性史、文化史の講座を担当した経験を持つ私に、英国の大学の現状並びに課題について考察した論文執筆依頼が来るようになった。最新情報を伝えるために英国の大学をいくつか訪問し、教員並びに学生を対象として聞き書きを行い、テープ起こしをし、日本語訳をつけた。時間をかなり要する仕事であったが、今まで全く知ることがなかった英国の大学の裏事情までわかったという感想が頂けたことはこの上ない喜びだった。

しかしまだ日本ではオーラルヒストリーの重要性が浸透していない。学術界では近年この手法が極めて有効な研究方法であるという認識が高まり、幅広い研究領域に属する研究者によって積極的に用いられるようになってきていることは事実である。一方で日本の大学では民俗学、社会人類学の分野を除いて、オーラルヒストリーについての講義は現在でも極めて少ないように思われる。そのため大学生でもオーラルヒストリーについての理解に乏しく、卒論の中でこの手法を取り入れようと考えている者が少ないことに不満を覚えた。そこで日本の大学で私が担当する英国文化史、日英比較女性史の授業の中に、英国の大学で必ず教授されている research methodology（研究方法論）と題する授業内容を 2 週間に亘って組み入れるようにしている。英米におけるオーラルヒストリーの発生と発展、この手法を修得するために必要な訓練方法並びにこの技法の長所と短所、卒論の中でのこの手法の具体的な活かし方を説明している。英国で購入したオーラルヒストリーのトレーニング用に作成されたビデオ教材やＣＤを使用することにより、まずはオーラルヒストリーに興味を持たせ、この方法を卒論の中で活かして欲しいと願う私の試みは徐々に実を結びつつある。

今後は自分自身の研究の中でオーラルヒストリーの手法を更に活用し、日本に世界のオーラルヒストリープロジェクトの成功例を積極的に紹介することで、この技法の有効性を日本人の間に広め、その更なる進展にも貢献できればと思っている。

オーラル・ヒストリーとの出会い：旅の交差点

酒井　順子

私がオーラル・ヒストリーに出会ったのは、1991年にエセックス大学社会学部修士課程社会史コースに留学した時であった。一年間のコースでは、社会史の理論と方法に関する授業のほかにジェンダー史とオーラル・ヒストリーの授業に出席した。社会史の理論と方法の授業では、当時「新しい歴史」と総称されていた表象研究、心理学、人類学を応用した歴史、構築主義的歴史観などの文献を読み、ジェンダー史の授業では、既に広汎に行われていたジェンダーを分析軸とする社会史研究について学んだ[1]。そして、1960年代以降新しい社会史の一環として発展していたオーラル・ヒストリーの方法論の授業は、私の歴史に対するそれまでの理解を変えるようなものだった。この社会史コースでオーラル・ヒストリーの手法を用いて修士論文を書いた経験が私のオーラル・ヒストリーとの最初の出会いだった。その後、このプロジェクトをさらに発展させて、ロンドンの日系金融コミュニティに生きた人々の世界をPhD論文としてまとめ、幸いにも本として出版することができた[2]。100人の録音インタビューには、1970年代以降英米金融文化が支配する国際金融の世界に参入した日本人金融マン（とウーマン）たちのジェンダー化されたアイデンティティが鮮鋭に表れていた。人々が語ってくれたライフストーリーには、彼らの歴史観、社会観、家族、教育、仕事への視点が絡み合った世界があり、ミクロなオーラル・ヒストリーは、大きな歴史を理解する窓口のように私には思われた。以来、私はイギリス在住の日本人の方々をはじめとして、機会がある度にライフストーリー・インタビューを個人的な研究として行ってきた。

日本に帰ってきた後、2003年に地域女性史研究者の方たちと一緒に「オーラル・ヒストリー総合研究会」に関わり、さらに同年正式に旗揚げをした「日本オーラル・ヒストリー学会（Japan Oral History Association, 略称JOHA）」にも参加させていただいた。「オーラル・ヒストリー総合研究会」に集った研究者の方々もJOHAのメンバーになると同時に、それぞれの会員の方々がそれまでに行ってこられた地域女性史、家族史、歴史認識問題、戦争と性の問題に関する研究を継続していかれる場としてこの研究会を生かしていくことをめざしておられた。研究会に集った方々は女性史研究者が中心であったが、ワークショップでは、女性史に限定することなく、オープンに交流を求めていた。他方JOHAは、当初から大学研究者と民間研究者、歴史学と社会学領域の研究者、戦争研究、移民研究、女性史研究などのオーラル・ヒストリーの中心的テーマを扱う研究者たちが広汎に参加され、英語による研究も視野に入れて国際的協力を志す人々も参加しておられた。「個人的な語り」を丁寧に聞いて歴史と社会を考察しようとした1960年代後半以降の「下からの歴史学」の潮流に乗って発展してきた英語圏のオーラル・ヒストリーと、日本における口述の歴史学・社会学そして地域女性史などの融合の場として、2000年代のオーラル・ヒストリーの可能性を追求する学会がスタートしたと私は感じていた。喧々諤々の議論もあったが、多様な研究者、多様なテーマ、多様な方法論の切磋琢磨の場を作るために、民主的な会則を作成し、オープンに会員を受け入れることをJOHAは目指していた。

この二つのオーラル・ヒストリー研究の場が成立してから約9年間、私は大学非常勤講師を掛け持ちして経済的に自立した生活を目指して働きながらも、オーラル・ヒストリー

の可能性、その自由闊達な議論の可能性に希望を持ち、自分自身の研究を発展させる道を模索していた。新しく成立した学会や研究会に参加することは多くの雑務をヴォランティアとして引き受けることであり、非常勤講師の生活と両立させることに厳しさはあったが、既存の学問の枠組みを横断していくオーラル・ヒストリーの可能性を私は信じていた。

JOHAでは、理事を2期担当したら交代するという会則を2007年の総会で定めたので、その規則の制定後4年経った2011年9月に私はJOHAの雑務から退いた。ちょうど東北で地震と津波が起こった年でもあった。初めての留学後20年が経過し、還暦を迎えた私は、もう一度自分の研究関心の原点を振り返り、これまでできなかったことを終わらせようと決意して2012年に日本を離れた。

それから約2年が過ぎた。この間私は、「ファミリー・ヒストリー」の手法と家族史に関する研究を読みつつ、自分自身の家族の歴史を調べてきた。その刺激となったのは、2011年にオーラル・ヒストリー総合研究会で自らのファミリー・ヒストリーについて話してくださった日系三世のニール・林さんと出会ったことだった。ニールさんはジェネオロジー（genealogy: 国勢調査などの個人に関する記録やインタビューによって家族の系譜を調べる研究）を基にした「ファミリー・ヒストリー」の手法にのっとり、家族の来歴を調べておられた。ニールさんの祖父は九州出身の船員で、第一次大戦中に、地中海で水夫が病気になって人員不足になったイギリス商船に雇われて、イーストエンドの移民街に住むようになった。その後、現地の女性と結婚して9人の子供をもうけたが、第二次大戦中は敵国人として暮らすことになり、ドイツ軍の空襲時にも妻子と一緒に防空壕に入ることはなかったそうである。それは敵国人としての自分への敵意が妻子に及ばないようにという配慮だったのかもしれない。戦前はランプ商として成功していたにもかかわらず、戦後は仕事を失い、1950年代に知人を訪ねた後にロンドン郊外で鉄道自殺を遂げることになった。当時はまだ戦争の傷跡が残り、イギリス在住の日本人は、元敵国人としての厳しい目に耐えて生きなければならない時であった。祖父の足跡を求めて来日したニールさんが、新聞社の援助もあって、九州で親戚に会うことができたというルーツ探しの旅の語りは感動的だったが、それだけには留まらない移民家族の歴史がそこにはあった。

私も自分探しの第一歩として、まず戸籍を取り寄せ、親戚の人たちの話を聞いた。私の父が出生後間もなく養子に出されたことは聞いていたが、そのことが父の人生や私たち家族にどのような影響を及ぼしたかについてはそれまで深く考えたことはなかった。戸籍を取り寄せてみると、父の実母もまた養女となっていた。祖母、父と二代にわたって養子を繰り返していた父の家族には他にも養子が多かった。なぜ、父は養子に出されたのだろうか。そしてなぜ私の実祖母は幼くして養女に出されたのだろうか。地域史を参照すると祖母の家庭は明治維新とそれに続く産業革命に乗り遅れた地域の商家であったことがわかった。父母の病気と家族の危機に際して最も幼かった祖母は一時金を付して養子に出された結果、自力で身を立てる人生を送ることとなったのである。16歳で私の父を産んだ祖母は父を養子に出し、父もまた養父母に育てられることとなったようだ。養家の親戚の援助を得て、父は幸運にも戦前の高等教育を受けることができたが、その人生をたどると父権の弱かった父の家族の有り様が浮き彫りになってきた。対照的に母の家族では「家族を守る父」の役割が明確だった。商売で身をおこした母方の祖父は自身の7人の子供だけではなく、妻の兄弟や孫たち、雇い人の家族の面倒も見ることを信条としていた。私の父方と母

方の家族文化はジェンダーの観点からみると対照的であった。また、技術者としての教育をうけた父が「生産」を重視する考えを持っていたのに対し、投機と商売で身を起こした祖父に育てられた母は「投資」を重視する考えを身につけていたことも２人の育った家族の文化を反映していた。私自身のファミリー・ヒストリーは、階層、地域、教育、職業、時代の経済的影響によって、家族内の文化や人間関係が大きく影響を受けていたことを教えてくれた。後発資本主義国として近代を迎えた日本においては、「ファミリー・ヒストリー」の手法は、明治維新とそれに続く産業革命、戦争、戦後の復興と高度成長期の産業構造の変化、バブル崩壊後のグローバル化の進展といった時代の変化に、個々の家族がどのように対応していったのかをたどることができる可能性を秘めている。

近代家族規範は、直系核家族という形態をとりながらも、戦後の日本社会におけるイデオロギー的な基盤として機能してきたが、家族構造の多様性も既に指摘されてきている。しかし、人々の内面や感情からみた家族の歴史には未開拓の分野が存在する。個人的な語りによって組み立てていく「ファミリー・ヒストリー」は、家族内の文化や人間関係にも注目することによって、規範家族に収斂されない個々の家族の戦略と個人の多様な生き方をあきらかにできるだろう。隠されてきた家族内の声をあきらかにすることは、個人がより柔軟に生きていく選択ができるための社会づくりに貢献できると私は思った。

「ファミリー・ヒストリー」の手法にはいくつかの弱点もある。第一に、恵まれた家族がその系譜を美化して描く趣味的な調査にもなりうる点である。同時に家族主義へのノスタルジアを助長し、家族規範を強化する恐れもある。第二に、どの家族にも、家族内の葛藤、争い、隠されてきたことなどが存在しうる。そのため、他のテーマを扱うオーラル・ヒストリー・プロジェクトと同様に、関係者のプライヴァシイを保護することが重要である。関係者がファミリー・ヒストリーの公表を望まない事例も多いだろう。また、高度に情報化された今日では、研究者が収集した個人情報が盗まれる危険性は限りなく大きい。

そうした弱点の克服には二つの方法が考えられる。第一には、多くの事例を集めて個別性を縮小し、テーマを持った集団の家族史オーラル・ヒストリーを目指すことである。第二に、個人的に対処しうる方法として、場所や人物設定を変えてフィクションとして描くことも可能かもしれない。もちろん、後者はオーラル・ヒストリーのジャンルを逸脱した表現方法となるかもしれないが。

1991年にオーラル・ヒストリーという研究方法、研究分野、研究運動に出会って以来、イギリスと日本で、多くの研究成果に触れることができ、オーラル・ヒストリー研究者たちと出会うことができた。オーラル・ヒストリーを通じて行き交う知的冒険者たちと出会えたことは旅の中途の得難い経験であった。終着点はまだ見えないが、今後も私自身のささやかなプロジェクトを続けていこうと思う。

---

[1] 酒井順子、「1980年代以降のイギリス女性史の潮流-エセックス大学における女性史セミナー『Gender and History』に参加して」、『女性史学』第3号、1993年、37－45頁。

[2] Junko Sakai, *Japanese Bankers in the City of London: Language, Culture and Identity in the Japanese Diaspora,* London: Routledge, 2000; reprinted as *The Clash of Economic Cultures*, New Jersey: Transaction Publishers, 2004.

三度の津波を生きぬいた女性たちの語りに学ぶ
―東日本大震災満3年を迎えて―

植田　朱美

「オーラル・ヒストリー総合研究会10周年記念誌」に本稿掲載の機会をいただきありがとうございます。ふり返りながら、「研究会の10年」と「私の10年」を重ねて辿る時間も貴重でした。

当会発足の頃より前半約5年間は、神奈川県での闘病と社会復帰のための生活。後半は、岩手県盛岡市でのNPO事業参画の3年間を経て、岩手県宮古市での現在の暮らしに至っています。盛岡での事業が満2年を迎える直前に、東日本大震災に見舞われ、その後1年間は、被災女性の支援が仕事の中心でした。

「オーラル・ヒストリー総合研究会」会員としては、例会への参加もなかなか叶わない10年でしたが、そんな中でもいろいろな出会いの機会をいただき、役員の方々のご苦労には感謝するばかりです。次の10年に何か役にたてるだろうかと考えつつ、本稿に向かっています。

去る3月11日、東日本大震災の発災から満3年を迎えました。岩手県沿岸は、ほとんど変わらない景色のままです。瓦礫の山（被災者の方々にとっては元の生活のすべてなのでこの呼び方にも抵抗はあります）だけは、ほぼ消えていきましたが、人口流出が止まりません。住まいも仕事場も再建されないままの3年間では、当然の人の流れ、特に若い世代の流れと言えます。仮設住まいの高齢者には、漁業再開の目途も立たず、「仮設住宅で死にたくない」との願いが伝わってきて、切実さが身に沁みます。

一方では風化が進み、毎年8月になれば「戦争」が語られるように、3月になれば「震災」が語られるメディア風景の定着を感じます。被災地に居ても、よそ者の距離感を感じながら暮す日々のなかで、そこだけは、被災者のように冷たい視線をなげてしまうアンバランスな感覚にとまどいます。

タイトル中の「三度の津波を生きぬいた女性たち」は、2013～14年度にかけて「岩手県立大学地域政策研究センター」と「岩手女性史を紡ぐ会」が協働で行った『歴史に学ぶ「女性と復興」～昭和三陸大津波と家族、共同体～』での聞き取りに際して、出会った方々です。地域は岩手県宮古市から釜石市までの沿岸。釜石市では、製鉄の街としての側面も視野にいれました。この研究では、オーラルヒストリーが中心になり、統計と新聞記事は補完資料になります。

「岩手女性史を紡ぐ会」は、2000年盛岡市主催の女性史講座受講生から立ち上げたサークルです。岩手の地域女性史を発掘し、記録することを目標に旗を掲げ、2005年からは、岩手女性史の基礎資料として「岩手日報」紙掲載女性関連記事による年表作成作業（1925～1934）と各種統計資料等の収集作業を進めていました。

1920年代後半から30年代は、不況、凶作、不漁に加えて、戦争への扉が大きく開かれた状況に目を奪われ、1933年3月3日の「昭和三陸地震」と「大津波」については、大事件として目についたものの、そこで立ち止まることなく素通りしていました。けれども、その作業途上で、2011年の東日本大震災に遭い、これまでの津波被害と復興過程を改めてふり返る必要性を痛感しました。かつての津波被災と復興を、女性史の

視点から捉え直すことがテーマになりました。

1933 年当時、沿岸の女性は、どんな生活と労働を生きていたのか。それは、津波被災によって、変わったのだろうか。戦前と戦後で大きく変わった法や社会機構の違いがあるけれど、当時を振り返ることで、東日本大震災の「女性と復興」に何らかのキーワードを手に入れられないだろうか等々。

1933 年当時の資料から、岩手県沿岸漁村が甚大な被害を受けた記録を探し、統計資料の収集と同時に、体験者探しも始まりました。けれど、協働研究を 2013 年 7 月に始めてすぐに研究会員全員が、「漁業、漁村、漁家」についてあまりにも知らないという壁にぶつかりました。日本全体が海に囲まれて各沿岸に漁業、漁村、漁家があるのに・・・と、自分たちの無知に唖然、呆然の出発です。女性史その他の先行研究にも、「農村、農業、農家」に関するものは多くみられますが、「漁業、漁村、漁家」については希少です。会員にも農家出身者がいるのみでした。その後 3 名の沿岸在住（宮古市、山田町）の協力者を得て、やっと体験者探しと沿岸漁業のイロハを教わりながらの 2 年間が始まりました。

聞き取りの際に出会った 17 名（うち夫妻 2 組）の語り手は、岩手県宮古市田老、宮古市鍬ヶ崎、宮古市重茂、山田町、大槌町、釜石市（現在の地名）で育ち、全員が 1933 年昭和三陸大地震による津波、1960 年チリ地震による津波、2011 年東日本大震災による津波を 3 回とも経験し、家を流されたり、火事で焼失したりの被災者です。現在仮設住宅にお住まいの方が半数です。

1933 年の津波被災について尋ねる目的でお会いするので、お話はまずそこから始まりますが、すぐに 2011 年の津波被災に飛び、そこから遡って、チリ地震津波、戦争体験へと拡がって行きました。戦争で夫を亡くした方も 2 名あります。岩手県出身の兵士はニューギニアでの戦死が多く、従順寡黙で我慢強く、激戦地送りに適したとのこと。「戦争未亡人」の体験談は、その後の子育て、労働、家族関連の苦労におよびました。1933 年の津波で親を亡くした方、過去の被災で 5 軒の家を失くし、今 6 軒目の家を建築中の方など、皆さんが 80 歳代後半から 90 歳代です。ともかく経験豊富な女性たちとの出会いを得て、急がなければ・・・と研究会も走り出しました。

昭和三陸大津波の体験者は「100 年生きたら 3 回津波に遭う」という親の代からの語り伝えをそのままに生きた方々です。「また流されるから立派な家は要らない。簡単にささっと建てればいいんだぁ」と、こともなげに語る 96 歳の女性は、戦争で夫を亡くしてもいます。別の女性は、津波で母親を亡くして姉妹を育て、戦争で夫を亡くして子を育て、さらに今また仮設住宅住まいでも「今が幸せ」と言葉少なに語りました。

昭和三陸大津波の死者・行方不明者は、3,064 名、負傷者は 1 万 2053 名に上り、とりわけ女性の犠牲者が多いことが記録されています。このことは、明治三陸大津波（1896 年）、チリ地震津波（1960）でも同様です。山下文男は、著書に「死者の性別は女の方が多かった―体力の問題と『家』の重荷―」という章を立て、女性の犠牲者が多い理由として、封建的な家における女性の立場、主婦や母、嫁として背負わされている重荷を挙げています。（2005 年『津波の恐怖―三陸津波伝承録』）この地方には「津波てんでんこ」（生き延びるためには他者にかまわず、それぞれ逃げろ）が語りつがれていますが、2011 年の津波でもケア役割を担う女性は「てんでんこ」に逃げ

られずに犠牲者が目立つようです。

一方、漁村、漁家では、労働の場で女性が活躍しています。「手間取り」と言われる海浜での賃労働を女性が担い、海産物加工（ワカメ、イカなど）を熟練の仕事としてきました。女性の熟練加工業は現在も変わらず、そのためどんどん減少しています。1933 年の震災後の防潮堤工事（田老）にも女性が多く、このことは今回の語りと NHK 放送番組等の映像に記録されています。

沿岸漁業は、「さっぱ船」と呼ばれる 2～3 人乗りの小船が主でした。三陸沿岸は、リアス式で出入りの激しい海岸線。そのため、浜ごとに港の規模が限られ、出入りの船の大きさも限られます。夫婦が 1 対で成り立つ漁が、ほとんどです。地域によって、女性が船に乗るところと乗らないところに分かれますが、いずれも、海岸での作業は女性の仕事です。「船底の板 1 枚下は、生死の境」のため親子は同船しない習慣で、相続を守ったようです。

家族単位が基本のため、労働による共同体的規制は少なくみえます。同族でも海上では、競争相手で、良い漁場は教えないとのこと。釜石の製鉄所や、宮古の精錬所が働き手を求めた時期でも「漁の腕のない奴が、工場へ行ったんだ」と言います。農業に比べ、労働での親族の関係は薄いようです。それでも、婿取りや養子縁組の事例は多く語られました。1933 年の津波被災後、義捐金を受けるための養子縁組はあったようですが、田畑の相続がないとすれば、何を継ぐ目的なのかを追うのが、これからの課題として残りました。

協働研究を進めるなか、今回の聞き取りで出会った女性たちの共通点を考えています。被害体験が多いかに見える彼女たちは、とてもパワフルに約 1 世紀を生き抜いてきました。お話を聞きに伺うと、毎回、聞き手の私たちが元気をもらって帰ってくるという経験をしています。彼女たちの共通点は、人生の多くの場面で「自分で決めて、行動したこと」、また戦後の漁業組合女性部での活動や被災時の共助など「他者への目配り、気配りができること」などかと、話し合っている最中です。

先輩女性たちのパワーに勇気づけられて、彼女らのパワーの源に迫り、これからの復興を進める一助にできればと考えています。ほんの 1 例しか御報告できませんが、機会を改めてご紹介できれば幸いです。